



GA文庫

そんな

お客さま

冒険者にこそ

保険

が必要です！

第9回

GA文庫大賞

奨励賞

魔物討伐で一攫千金を
目指したい！
でも、討伐失敗時に
遺される家族が心配

序章 十 新入社員がやってきた

十 Brave Insurance
may help you a lot

「……ふう、こっちの魔物は片づいたわよ、ヒカゲ君。他には来てない？」

「大丈夫です、リゼッタさん。さすがの手際ですね」

危険な魔獣が闊歩する、薄暗い〈魔獣の森〉。

今回の仕事は、ここに討伐へ向かった契約者の搜索だ。

「さて、お客さんの討伐予定地はまだ先ね。ちゃつちゃと進むわよ」

リゼッタさんはたった今仕留めたオークの胴体から剣を抜き血を払う。その動作に合わせて長いブロンドの髪が優雅に揺れる。女性でありながら、と言ったら失礼かもしれないが、とにかく見事な剣捌きはつい見とれてしまう。

「そうですね、先を急ぎましょう」

薄暗く不気味な森の中を再び歩きはじめる。藪をかき分け、ぬかるんだ土を踏みしめ、荒れた獣道を進んでいく。

「ねえ、ヒカゲ君」

不意にすぐ後ろからリゼッタさんの声が響く。

「なんですか？ 魔物の気配でもありましたか？」

「違う違う。実は、ちよつと君に隠してたことがあったのよ」

「隠してたこと、ですか？」

問い返すと、リゼッタさんは小さく頷いて言葉が続ける。

「実は私、今回の調査を最後にこの仕事を辞めるのよ」

「……ええ!？」

ここが危険な魔王領であることも忘れて、驚きの声を上げてしまった。

そんな僕に、リゼッタさんは申し訳なさそうに笑みを返す。

「氣を使わせなくなかったから、今日まで黙ってたのよ。ごめんね」

「い、いえ……そうだったんですか。でも、どうして急に？」

「もともと、二十二歳になったら辞めるって決めてたのよね。後輩が優秀なおかげで、なんの

未練もなく去っていきけるわ」

そう言われても、こちらは突然のことに気持ちの整理がつかない。

思い返せば、優秀な剣士で仕事もできるリゼッタさんには、かなり頼っていた。それに、容姿端麗で飄々とした性格の彼女に、正直憧れていたところもある。

「……本当に残念です」

「そう言ってもらえると、この一年間君に仕事を教え込んだ甲斐があったわ」

そうして話しながらも周囲に気を配って歩いていた僕は、ふと前方に人影を見つけた。ところどころ周囲の枝が折れ、地面も荒れている。おそらくこの辺りで戦闘があったのだらう。

「誰か倒れてるみたいですね。ちょっと様子を見てきます」

「わかったわ。まだ魔物が近くにいるかもしれないから、気をつけて」

僕は藪の間をかき分け、荒れた地面を飛び越えてその人影へと近づいていく。

微動だにせず地面に倒れ伏し、手足はひどく折れ曲がっている。身に着けた鎧の継ぎ目からは、溢れ出た血が乾いてこびりついていていた。一目で、生きてはいないとわかる状態だ。

「エビルコングにでも遭遇したのかな。ええと、この人の荷物は……」

すぐ近くには布袋が投げだされており、僕はその中身を確認していく。

程なくして、お目当ての物を発見した。

「ええと、『勇者認定番号89 リック・ガーランド』。……契約者の死亡確認」

「どうだった？　うちの契約者さんだったかしら？」

リゼッタさんも藪を抜けて、僕の近くまで来る。

「はい、やっぱりガーランドさんでした。目的地に向かう途中で、強い魔物に襲われたんですかね」

念写の魔力が込められた羊皮紙ようひしを掲げて、紙上に眼前の光景を記録する。

「記録が終わりました。後は遺品を回収しましょう」

僕とリゼッタさんは手分けして、周囲に散らばった装備や荷物を調べていく。リゼッタさんは遺体に屈み込んで、ガントレットを回収しながら呟いた。

「最後の仕事くらいは、契約者さんが死なずに終わってほしかったけど……。思うようにいかないわね」

「相手は魔物ですからね。僕達の都合なんて考えてくれませんよ」

「そうね。ただ、ガーランドさんは奥さんと仲が良くて、契約の時も一緒に来てたのよ。それと思うと、やり切れない気持ちになっちゃうのよね」

「……とにかく、これで今回の仕事は終わりです。王国に戻しましょう」

僕達は引き返しはじめるが、それからほんの数秒後。

ズウン

何か、重量感のある足音のような気配。

まだ遠いけれど、確実に近づいてきている。

「リゼッタさん、大型の魔獣か何かがこっちに来てます。動かないでください」

「えっ？ 私には何も聞こえないけど……」

「下手に動くと気づかれるかもしれません。ここでやり過ごしましょう」

リゼッタさんは頷いて僕の近くまで歩み寄る。

僕は体内の魔力を指先に集中させて、呪文じゅもんを小声で唱える。

「《ディハイド》」

次の瞬間、僕とリゼッタさんを囲うようにして透明の薄い空気の膜が球状に広がる。遠くからはズシン、ズシンと重々しい足音が徐々に近づいてくる。

リゼッタさんは足音の主を見ると、額に汗を浮かべた。

「うわー……エビルコングじゃない。もうちょっと気づくのが遅かったら、あんなのと戦う羽目になったのね。下手したら最後の仕事で死んでたわよ」

エビルコング。全長四メートルはあろうかという巨体の猿型魔獣。

丸太のように太い四肢を交互に動かして、木々の間を悠然と歩いていく。さながら、〈魔獣の森〉の主と言わんばかりだ。

もともと、エビルコングはほんの数メートル近くにいた僕達の姿に、まったく気づかない。

「私が今まで無事に働き終えたのは、君のこの魔法に何度も助けられたおかげね。こんなに近いのに気づかれないんだから、便利なものよね」

「便利ではありませんけど、戦闘では不意打ちに使うくらいしかできませんよ」

「相変わらず謙遜ばっかりねえ。でも私は、本当に《ディハイド》は凄（すこ）い魔法だと思っているのよ。一切知覚いっさくできなくなるなんて、反則もいいところだわ。私も使えたらいいのに」

「こればかりは遺伝もありますから。……さて、そろそろ大丈夫かな」



話しているうちに、エビルコングの姿はすっかり遠ざかっていった。
僕達は魔物の気配に注意しながら、再び王国への帰路を辿りはじめた。

「んっ……ふう。これで最後の仕事も完了、っと」

魔王領と王国領の境目である〈タナ川〉を渡り切ると、リゼッタさんは深く溜息を吐いた。
ここまで来れば、もう城下町は目と鼻の先。魔物に襲われることもまずない。

「お疲れ様でした、リゼッタさん。……今まで仕事を教えてくださって、本当にありがとうございます」
ざいました。これから寂しくなります」

「ヒカゲ君もお疲れ。ま、私がいなくても君なら問題なく仕事をこなせるよ。それに、社長の
ことだからすぐ後任の社員も用意するだろうし」

「そうだといいんですけど……」

話しているうちに、城下町の出入り口に当たる大きな城門へと辿り着く。

「それじゃ、私はこれで。社長にもよろしく言っておいてね」

「わかりました。お元気で、リゼッタさん。落ち着いたら店に顔を出しに来てください」
最後に頷きを返してから、リゼッタさんは早足で道の先へと歩き去っていく。

去り際に見た横顔は、何か強い決意を抱いているような印象を受けた。
そう言えば、仕事を辞めてから何をするのか聞きそびれてしまった。



魔王領と川一本を挟んで向き合った場所に位置する国家、オルティス王国。

この国の城下町は、高い城壁でぐるりと円形に囲まれている。

僕はその東側に広がる商業区域の、奥まったところへと向かっていく。

活気のある市場からはやや離れた、人通りの少ない裏通り。そこに、保険商『ブレイヴカンパニー』は狭い店舗を構えている。

「戻りました、社長」

店のドアを開けると、小さなカウンターのの中には筋肉質で長身の男性が一人。

「おう、おかえりヒカゲ。無事で何よりだ」

答えるのは、ブレイヴカンパニー社長、ミゲル・バーンズ。

彼は燃える炎のような赤い髪をガリガリと掻き、ばつの悪い表情を浮かべていた。

その視線の先には、来客用ソファに腰掛けた中年女性の姿がある。女性は慌てた様子で立ち上がる^{すが}ると、縋るような目を僕に向けた。

「あの人が調査員さんですね!？」

……ああ、社長の表情の理由はこれか。

社長はカウンターから立ち上がり、女性の方に歩み寄っていく。

コッソ、コッソ、と右足の木製義足が歩みに合わせて乾いた音を立てる。

「あー、こちらガーランドさんの奥方だ。どうしても調査結果をすぐに聞きたいらしくて、店でお待ちに……」

社長の言葉を遮^{さへぎ}って、奥方は震えた声を上げる。

「主人は……主人は無事でしたよね!? きつと怪我^{けが}でもして帰るのが遅れただけで、今は医者のところにも行っているのよね?」

実際、安否調査に行ったらそういう理由で帰還が遅れていることも珍しくはない。

でも、残念ながら今回はそうじゃなかった。

僕は奥方の問いに答える代わりに、遺品のガントレットを差し出した。

「社長への報告も兼ねて、このまま説明します。結論から言うと、リック・ガーランドさんは亡くなっていました」

奥方はしばらく言葉を失っていたが、掠^{かす}れた声を絞りだすようにして呟く。

「……続けてください」

「はい。こちらが念写魔法で写した、発見時の状況です。〈魔獣の森〉奥地で強大な魔獣、おそらくはエビルコングと遭遇してしまい、逃げ切れなかったものと推測されます」

奥方は小さく頷きを返すのみで、言葉に詰まり涙を流しはじめる。僕もやり切れない気持ち

になつてしまふが、この仕事をしていればよくあることだ。

社長は金貨を五枚取りだし、テーブルの上に置く。

「奥さん、ガーランドの保険金です。あいつのことは、うちの会社から王国府に連絡しておきましょう。……奥さんは帰つてお休みになつた方がいい」

「うう……すみません、バーンズさん。失礼します」

「はい、お氣をつけて。ガーランドの葬式には俺も顔を出しますので、またその時に」
目から涙を溢れさせながら、奥方は俯き加減で店を後にした。

「この瞬間だけは、どうにも慣れやしねえな。……ガーランドの馬鹿野郎が」

奥方の足音が遠ざかり、社長はどっかりとソファに座り込む。

「仕方ないですよ。魔王領に討伐に行くのであれば、そういうリスクは付き物ですから」

「そりゃあ違えねえ。でも慣れないもんは慣れないんだよ」

僕はカウンター内の椅子に腰を下ろしつつ、社長に尋ねる。

「ところで社長、リゼッタさんが辞めるなんて聞いてませんでしたよ」

「悪かったな。余計な氣を使わせたくないからつて、リゼッタに口止めされてたんだよ」

確かに律儀なりゼッタさんは、そういう氣遣いをしそうだ。

「それじゃあ、次からは僕が一人で魔王領の調査に行くんですか？」

「その件だが、俺のコネで王国から斡旋してもらおう。国王に頼んである。一人じゃあ、野営する時に見張りも立てられねえからな」

そこまで言うとは、社長は店のドアへと向かい表に掲げてあった看板を裏返した。

「もう店を閉めるんですか？」

「ああ。今言った新しい調査員候補が、もうすぐ来る予定でな」

「そうだったんですか。人員の補充が早いのは助かります」

リゼッタさんの予想通りだ。

「わかつてると思うが、お前が新人の教育係だからな。もうお前もブレイヴカンパニーで働いて一年以上だ。後輩ができるにもいいタイミングだろ？」

「正直、こんな危険で人気のない仕事はお勧めできませんけどね。とりあえず今日は店を閉めるなら、掃除しちやいますよ」

閉店後の掃除は、当然下っ端である僕の仕事だ。

一方社長はカウンターの中に戻って帳簿を開き、会社の収支計算をはじめた。

頭脳労働がまったく似合わない筋肉男が、こんな経営仕事をやっているのだ。人は見た目にやらないものである。

「おうヒカゲ、今お前失礼なことを思わなかったか？」

「いえ、別に」

なんでこんなに勘がいいのか。と、思いつつ淡々と掃除を進める。

一通り終わったところで切り上げると、全身にのしかかるような疲労感を覚える。二日ばかりの魔王領調査から帰還したばかりなのだから、無理もない。今日はもう休もう。

「じゃあ社長、僕はこれで上がりますよ」

「ちよつと待て。例の新しい社員候補が到着したみたいだ。お前も一緒に面接していけ」

社長の言うように、店の前で一頭の馬が止まった気配がする。

別にどんな人間が来ようが、社長の一存で決まるのだ。疲れているから早く休みたい……けどまあ、新しい同僚がどんな人物か見ておくのも悪くないか。

「わかりました。お腹も空いてるので、手早く済ませてください」

「ああ。何しろ国王に直接頼んで斡旋してもらった奴だ。問題なく採用になるだろうよ」
すぐにドアが鈴の音を立てて開き、ロープのフードを深く被った男性が入ってくる。

その男性の後ろにもう一人、同じ色合いのロープを着た小柄な人物も続く。ロープの隙間からは長く艶のある青髪が見え隠れしていた。体の線の細さからも、こちらは女性だろうか。

「久しぶりだな、ミゲル。相変わらず元気そうで何よりだ」

男性は社長に向けて言うと、頭からフードをばさりと下ろす。顎髭を蓄えた精悍な顔立ち。

見た感じ、社長と同じく四十歳前後だろうか。

社長とその男性は顔を見合わせると、同時に嬉しそうな笑みを浮かべた。

「レティスでめえ……国王様のくせにこんな城下町にノコノコ出てきていいのかよ?」

「え?」

いやいや、国王様ともあろう人物がこんなところに自ら来るなんて。

「驚いてんのか、ヒカゲ? この髭面男がオルティス王国三代目国王、レティス・ウィングフィールド様だぞ」

「そ、そうなんですか」

そんなに偉い相手になんと挨拶^{あいさつ}すればいいのか咄嗟^{とっさ}に思いつかず、僕はひとまず頭を下げる。国王も軽く頭を下げ返してくれた。

「しかしお前が直々に来るなんて、久々に酒でも飲みに来たのか?」

「そうだな、久しぶりに飲みたいところだが……今日はそんな用件じゃねえ」

国王の鋭い視線を受けて、社長の表情からも柔らかさが消える。

「だったら、なんの用なんだ? まさか、そっちのちびっ娘^こがうちの新入社員候補、つてわけじゃねえだろう?」

社長が視線を向けたその人物は、フードを目深に被ったまま何も答えない。

「お前に折り入って頼み事がある。このオルティス王国の将来を左右する大切なことだ。これから話すことは、他言無用で頼む」

「……わかった。うちの下っ端は外させるか?」

「いや、構わない。確か、ヒカゲ君だったな。俺は君の父親とは昔一緒に組んで、魔物討伐をしていたんだ。君も話くらいは聞いたことがあるだろう」

こちらを向いた国王は、口元に微かに笑みを浮かべていた。

確かに、父さんが生きていた頃そんな話を聞いた覚えがある。ちなみに社長もその仲間だったとか。

「はい、そう聞いています」

僕の答えを聞くと、国王は少しだけ嬉しそうに微笑む。

「そいつは何よりだ。……さて本題に移ろう。俺はあと二、三年で王の座を降りることを決心したんだ。俺ももう四十近い。第一線で剣を取って戦うのが難しくなってくるからな」

「そうかあ？ まだまだそこいらの魔物には負けねえだろ？」

「茶化すな。知つての通り、この国は魔王領との境にある。俺は魔物の侵略から民を守り抜くために、七年間全てを懸けて王の責務を勤め上げてきたつもりだ」

「……ああ、知ってるよ。んで、その引退宣言をするためにここまで来たのか？」

社長と国王の間から、緊張感がピリピリと伝わってくる。

……本当に僕が聞いていい話なのだろうか。

「俺は今まで、重大な責任をすっかり蔑ろにしていたことに気づいちまったんだ」

「なんだよ、そりゃ？」

「後継者の育成だ。国王には、国の未来を託すのに相応ふさわしい後継を選定する責任がある」

「まあ、そりゃあそうかもな。で、その後継者に当てはあるのか？」

その問いに対して国王は、自分の横に座った少女を一瞥いちべつしてから答える。

「俺には三人の王子と三人の王女がいて、そいつら皆に王位を継承する権利がある。……で、一人ずつ呼びだして確認したら、ガキ共全員が王位の継承を希望したんだよ」

「いいじゃねえか、意欲的でよ」

社長は軽い調子で答える。

しかし国王の言葉は相変わらず、重々しさを漂わせていた。

「俺は今まで国王の仕事にかまけていて、ガキ共の教育は専属の学者に任せ切りにしていた。そのせいで、最も大切なことを今日まで学ばせることができていなかった」

「大切なこと？」

国王はより険しい表情を浮かべつつ、社長に答える。

「俺達人間が何百年にもわたって戦い続けている魔物が、どういう存在なのかということだ」

「そんなもん、実際に戦ってみないと何もわからねえだろうよ」

「そうだ。言ってみれば国王ってのは、魔物と戦う何千もの兵士の上に立ち、指揮を取る人間だ。魔物のことを口々に知らないやつには、任せられねえ」

「確かにそうだろうが、だったらどうするつもりなんだ？」

「だから俺は、決めたんだ。王位を退くまでの残った期間で、ガキ共を王宮の外に放りだして修行させることをな」

それを聞くと、社長は何かを察したかのように目を見開いた。

「おいおい、まさかお前が連れてきたそのちびっ娘は……」

「ああ、そのまさかだ」

国王はそう答えると、横に座っていた少女の頭からフードを下ろす。

——育ちの良さそうな、上品で綺麗な女の子。それが率直な第一印象だった。

長く艶のある青い髪と、端正に整いながらも子供っぽい面影が残る顔立ち。年の頃は僕より少し下くらいだろうか。

その少女は明らかに不満そうな視線を、国王に向けていた。

「デルフィニア・ウィングフィールド。第三王女に当たる末っ子だ。ついこの前十六歳になったから、こいつも王位の継承権がある。この子を、お前の会社でしばらく働かせて……」

「お父様！ そのような修行などせずとも、デルフィニアこそが王位に相応しいのは明白だと考えます！」

デルフィニアの高く綺麗な声が、ぴしゃりと国王の言葉を遮った。

「こんな狭苦しいところで王族の私が働くなどと、お父様らしくない冗談ですわ」

国王に対して、随分と強気な態度。うん、生意気で高飛車な女の子、これが第二印象だ。



それにしても狭苦しいところとは、失礼極まりない。事実だけれど。

「デル、少し黙っていてくれ。……どうなんだミゲル、頼めるか？」

「本当にいいのか？ 俺がお前に頼んだのは勇者保険の調査員だ。つまり、魔物がわんさといる魔王領に冒険者の安否調査をしに行くんだ。命の保証はできねえぞ？」

「死んだら、その時はその時だ。死ぬ危険のない安全なところで魔物を眺めて、何を得られる？」

毅然とした口調で、国王は答える。

「お、お父様!？」

デルフィニアが驚いて大声を上げた。

しかし国王はそれを意に介さず続ける。

「俺には、この国を託せる後継者を育てる責任がある。そのためなら、例えばギキ共のうち五人が死んでも、一人が相応の成長をしてくれればいい」

「……本当にいいんだな？」

「お前ならわかるだろう。俺にとって、この国を守り抜く以上に優先することはない。立派な後継者を育てるためなら、家族への愛情なんざいくらでも捨てる覚悟だ」

国王がこんな苛烈な人物だとは、知らなかった。何も実の娘を目の前にして、こんなことを言わなくても良さそうなものだが。

「相変わらず頭の固い野郎だな。……まあ、話はわかった。王女様だろうがなんだろうが、うちで根性叩き直すのは構わねえ」

「すまないな。手間かけて悪いが、後は任せたぞ」

そう言い終わると国王はローブのフードを被り直す。

半ば呆けていた様子のデルフィニアが慌てて立ち上がり、国王の腕を掴む。

「冗談が過ぎますわ！ 突然こんなところに連れてきて、しかも働けだなど！ そのうえ、この私が死んでも構わないなんて……」

そりゃまあ、いきなりそんなことを言われれば慌てもするだろう。しかし国王の様子から、その言葉が冗談ではないことは僕にもよくわかる。

国王は身を屈めて、デルフィニアの肩に手を添える。

「嫌になったらいつでも王宮に帰ってきて構わないぞ。——ただし、その時はお前に王位を継承させることは決してない」

「そ、そんな……」

「王族の人間だと知られたら厄介事も増えるだろうから、極力それも隠すようにな。ミゲル、デルフィニアを頼む」

社長は分厚い胸をドンと叩き、笑顔で答える。

「おうよ、任せとけ。ただし、まったく役に立たないようなら王宮に突き返すからな」

「その辺の判断も任せる。それじゃあしつかりやれよ、デル」

国王はデルフィニアの腕を振りほどき、店の外へと歩き去ってしまった。

「そんなわけで、この王女さんの教育係はお前だからな、ヒカゲ。頼んだぞ」

国王の乗った馬の足音が遠ざかると、社長が僕の肩を掴んで笑顔を浮かべた。

「ええ……」

よりによって、あの傲慢そうな王女様の教育係なのか。

僕が溜息を漏らすと、デルフィニアがくると身を翻してこちらを向いた。あまり成長していない様子の胸を張って、堂々とした様子で。

「あなたたち、頭が高いわよ！ 私はオルティス王国第三王女、デルフィニア・ウイング
フィールドなのよ！ まずは跪いて丁寧な出迎えを……痛たたた！」

偉そうな演説を遮り、社長がその柔らかそうな頬をつねった。

「嬢ちゃん、頭を下げるのはあんただぜ。『未熟者ですがこれからお世話になります、洪くて
かっこいい敏腕社長のミゲルおじさま』ってな」

洪くてかっこいい人の発言とは思えないが、まあそれはどうでもいい。

デルフィニアは涙目になりながらも、社長の手を掴んで頬から離す。

「この私に無礼を働いたわね！ 王族に手を上げたものは鞭打ちの刑に処されるのよ！」

「おう、だったら王宮に行ってご自慢の衛兵を何人でも連れてくるといい」

社長に強く返されて、デルフィニアはぐぬぬと唇を噛んで黙り込む。

それから数秒置いて、ぼそりと不服そうに小さな声で言った。

「……よ、よろしくお願いします」

「おう、よろしくな」

まず主従関係を明確にする。なんだか犬のしつけを見ているようだ。

「じゃあ今からお前は、ブレイヴカンパニーの見習い社員ってわけだ。身分を隠す必要もあるし、デルフィニアって名前はちよつと長いからな。デルフィ、と呼ばせてもらうぞ」

「なっ、か、勝手なことを……」

デルフィニアの文句を遮るように、社長は言葉を続ける。

「改めて自己紹介するか。俺が社長のミゲル・バーンズだ。それからこの根暗そうなやつが、ヒカゲ・レインズ。まだ十七歳のガキだがシーフの技能は超一流だ。何しろ父親があの……」
僕は社長の言葉を遮って、デルフィニアに向けて口を開く。

「ヒカゲです、よろしく」

「シーフ……ねえ。ふん、まあいいわ、せいぜい無礼を働かないことね」

そんなことを言われても、王族への接し方なんてまったく知らない。

とにかくこれで自己紹介も終わり、騒ぎも一段落しただろう。

僕は二階の寢床へと向かおうとしたが、それより先に社長が声を上げた。

「デルフィ、お前レティスから寢泊まりする場所は用意されているのか？」

「何も言われていないわ。当然、あなたたちが快適で安全な宿を用意してくれるのよね？」

「はっはっは、うちの経営はカツカツでなあ。そんな立派な宿を用意する余裕はない！」

そんな情けないことを得意気に言わなくても。

「社長の家に泊めてあげればいいんじゃないですか？　奥さんと子供もいるし、いい社会勉強になると思いますけど」

「ダメだ。うちのカミさんは過保護にしちまうだろうから、修行にならねえ。そうだな……店の二階を今夜から二人で使え」

「……はい？」

「なんならいっそ、同じベッドで寝ちまっても構わねえぞ。その方がよっぽど社会勉強になるってんだ」

社会勉強どころか社会的抹殺を食らいそうな話だ。と、僕は他人事ひとごとのように考える。

一方のデルフィは、顔を真っ赤まかにして社長を睨にらんでいた。

「ばっ、ばばば馬鹿を言わないで！」

「冗談だからそう怒るなっ。……ただし、半分は本気だ。デルフィ、お前は二階で寢泊まり

しろ。ヒカゲ、悪いが今日からは一階の応接用ソファで寝泊まりしてくれるか?」

喚く^{わめ}デルフィを軽くないしながら、社長は僕に向けて言う。

「わかりました。僕は屋根さえあればどこでも平気です」

「冗談じゃないわ! 他に警備の者も一切いない状況で、たった一人で寝ろというの!? もしこの馬の骨が理性を失い、私に襲いかかってきたらどうするのよ!」

なかなか酷い^{ひど}言われようである。

まあ確かにデルフィは可愛らしい^{かわい}顔立ちをしているのは事実。肌艶も白くなめらかで、育ちの良さも一目瞭然。魅力がないと言え^{うそ}ば嘘になる。

ただいかんせん、体の成長具合が不十分と言わざるを得ない。

——もっとスタイルの良いお姉さんタイプが、僕の好みなのである。

そんな失礼なことを考えていると、社長はデルフィの言葉を受け流しつつ歩きだす。

「その時は、タマキンの一つでも潰^{つぶ}してやれば大丈夫だ」

それは僕が大丈夫じゃない。いやまあ襲いかかるつもりはないけど。

「え、え、ちょっと、本気なの!? こんな狭いところでこの私が寝泊まりを!」

「ヒカゲ、後は頼んだぞ。俺あそろそろ帰らねえとカミさんに叱られる。そんじゃあな」
言い終わると同時に社長は店の外に姿を消してしまふ。

後に残されたデルフィは呆然^{ぼうぜん}とした様子で立ち尽くす。

社長め、後は僕に丸投げか。

「それじゃあ寢床を案内するよ、王女様。……っと、その呼び方はまずいのか。馴れ馴れしくて申し訳ないけど、僕も君のことをデルフィと呼ばせてもらうよ」

「ミゲル社長はともかく、あなたみたいな馬の骨にまでそんな無礼な呼び方をされるなんて。耐えがたい屈辱だわ……」

「はいはい、悪かったよ」

適当に返事をしつつ、通路の奥にある階段を上がっていく。

蠟燭の薄暗い光が照らす中、ギシギシと木製の古い階段が軋む。

「これが本当に人間の住むところなの？ 王宮の馬小屋の方がよほど立派よ」

「少なくとも僕は快適に暮らしていたけどね」

階段を上がり切って小さなドアを開けると、そこが住み慣れた狭苦しい屋根裏部屋だ。

部屋の半分近くは、木製の手作りベッドが占めている。もう半分も会社の物資があちこちに置かれて散らかっている。

部屋を見回したデルフィは、しばし絶句した後、声を上げた。

「や、やっぱりこんな人間の住む環境じゃないわ……」

「こまめに掃除してたから、一応清潔だよ。じゃあ僕は一階にいるから、何かあったら呼んでね」

「あ、あなた、ヒカゲとか言ったわね。王族の純潔を汚そうものなら、百回打ち首になっても足りない重罪なのよ！ 馬鹿なことは考えないことね！」

この王女様は男を皆、性欲魔神か何かだと思っているのだろうか。
いやまあ、そういう警戒心を持つのは確かに大事だけれど。

「さっそく明日から仕事を教えるから、早めに寝といてね。働くのに一番大事なのは健康管理だから」

「う……わ、わかったわよ！ 私はいずれ王位を継ぐのよ、どんな厳しい環境に置かれようと決して屈服しないわ！」

「まあ、頑張つて。……それから、一つ覚えておいて。僕は、仕事と関係ない面倒事には、首を突っ込まない主義なんだ。君の教育係は僕の仕事だから、しっかりやる。でも、余計な面倒事には手を貸さないからね」

「ふんだ、嫌な感じね。あなたの助けなどなくても、私はこの試練を乗り越えてみせるわ！」

「その方が僕も助かるよ。おやすみ、デルフィ」

そう言い残して、僕は屋根裏部屋を後にした。

「僕が王女様の教育係、ねえ」

夜、毛布に包まってソファに横たわりながら、僕は一人呟く。

冷静に考えると、相当責任の重い仕事を押しつけられたような気がしてくる。といつても、王女様のあの様子ではそう長くもたずに王宮に逃げだすだろう。それまでの間せいぜい、教育係を頑張ればいいだけの話だ。

心配しすぎても仕方がない。今日はもう眠ろう。

第一章 十 勇者保険会社のお仕事

十 Brave Insurance
may help you a lot

翌朝、太陽が昇りはじめたばかりの薄暗い時間に僕は目を覚ます。

早起きは小さい頃からの習慣。父さんが生きていた頃、魔王領を連れ回されて野宿ばかりしていた名残^{なごり}みたいなものだ。

ひとまず顔を洗って、朝食の準備にとりかかろうと食料庫を覗き込む^{のぞ}。

コツ、コツ

控えめに店のドアをノックする音。

お客さんが来る時間ではないし、社長もこんな早く店に来ることはない。

「はい、どちらさまですか？」

ドアを開けると見知らぬ女性が一人、大きな布袋を手に抱えて立っていた。

黒を基調としたメイド服に身を包んだ、美しい顔立ちの女性。綺麗な銀色の髪はセミロングに整えられ、落ち着いた雰囲気^{きぶん}を漂^{ただ}わせている。誰だこの美人は。

「早い時間にお邪魔してしまい、申し訳ございません。ヒカゲ・レイنز様ですね？」
容姿だけでなく、声まで透き通るような美しさである。優美な雰囲気^{きぶん}の女性だ。

「は、はい、そうですけど、あなたは？」

理想的と言っても過言ではないほどの美人を前に、朝の眠気が一気に吹っ飛ぶ。

「私、王宮でデルフィニア様の専属メイドを務めております、ケイト・ローゼスと申します」「王国のメイドさんでしたか。どのようなご用件ですか？」

「こちらでデルフィニア様がお世話になると伺い、お召し替え用の衣服を持って参りました。お手数でございますが、お渡しいただけますでしょうか？」

そう言うと、手に持っていた大きな布袋を僕に手渡す。

「あの我が儘な王女様なら二階で寝てますが、良ければ起こしてきましょうか？」

「いえ、直接お会いすることは国王様に禁じられているんです。お嬢様は聡明な方ですが、あまり世間というものを知りません。どうか、ヒカゲ様のご助力をお願いいたします」

僕の右手をケイトさんの白い手が包む。

細くしなやかで、少しだけ冷たい指尖の感触にどきりと胸が高鳴ってしまふ。

「え、ええまあ、頑張ります」

ケイトさんは優美な笑みを浮かべると、少し碎けた感じの口調に変わる。

「あんまり我が儘を言うようでしたら、お尻をペンペンして構いませんから。ふふっ、それでは私はこれで。またお会いしましょう、ヒカゲさん」

「あ、は、はい、ありがとうございます」

ケイトさんはメイド服のスカートを摘んで軽く会釈して、歩き去っていく。

流石は王宮の専属メイドさん。とても感じの良い美人だった。デルフィよりむしろ、彼女の方が王女様らしい気品に溢れているのではないだろうか。

僕は朝から良い気分になり、鼻歌まじりに朝食の準備にとりかかった。

窓越しの朝陽が明るさを増していく中で、僕は淡々と朝食作りに励む。

竈に火を起こしてフライパンを温め、両面を炙ったハムの上に卵を落とす。ジュワジュワと食欲をそそる音と湯気が、台所に広がっていく。

フライパンの脇にはオリーヴの実とトマトをのせて、温める。後は焼けるのを待つだけ。ふと視線を感じて振り返ると、デルフィが壁の陰からこちらを覗き込んでいた。

「おはよう、デルフィ。どうかしたの？」

「こ、こつちを見ないで！　いくらあんたが相手でも、寝起きのままの姿を殿方に見られるなんて、屈辱にも程があるわ！」

朝から元気なことで、と思いつつ言われた通り視線をフライパンへ戻す。

「今朝、ケイトさんっていうメイドさんが君の着替えを持ってきてくれたよ。二階のドアの前に置いておいたから、着替えてからまたここに来て。朝食の準備がすぐにできるから」

「変な袋が置いてあったと思ったら、そういうことだったのね。流石にケイトは気が利くわ」

そう言うでデルフィは早足で二階へと戻っていった。

僕はその間に、フライパンを火から下ろして竈の火を消す。

予め平たく切っておいたライ麦パンの上に、半熟のハムエッグをのせる。オリーフとトマトも盛り付け、コップにミルクを注いで朝食の準備完了。我ながら良い出来だ。

デルフィも二階から下りて来て、台所に姿を見せる。

「こんな地味で庶民らしい服、着たことがないわ。もう少し綺麗なドレスを用意できなかったのかしら？」

控えめにフリルをあしらった白いブラウスに、黒地のスカート。肩には濃紺色のケープを羽織っていた。

街で歩いていても違和感のない、それでいて上品に整った装い。

少なくともこれで、一見して王族らしくは見えないだろう。それに正直、なかなか可愛い。

「結構似合ってると思うよ。それに派手なドレスを着て仕事するわけにもいかないでしょ。ほら、朝ご飯ができてるから食べよう」

「に、似合ってるのかしら？ まあいいわ、とにかく朝食を……って、何よこれは!? ナイフもフォークもないし、パンの上に卵がのってるわ! こんなものどうやって食べるのよ!」

まったく騒がしい王女様である。

「こーうやって手で掴んで、かぶりつくんだよ。熱いうちに食べないと味が落ちるよ」

僕はデルフィに構わずハムエッグパンを手にとると、遠慮なくがぶりと頬張る。

半熟の黄身がとろりと口の中で広がっていく。

厚く切ったハムの心地よい歯ごたえ。香ばしいライ麦パンの香り。咀嚼そしゃくすること、食材が素敵なハーモニーを奏でていく。

「う……こ、これが庶民流の朝食なのかしら。し、仕方ないわ、これも王位継承のための試練と思えば……あむっ」

デルフィはやや不器用ながらもパンを頬張って、もぐもぐ咀嚼する。すぐにその表情は、疑心から驚嘆へと変貌する。

「え、お、美味おいしい……。こんな下品な食べ物が!？」

「そんなに下品かな……」

手掴みで食べるくらいで、そこまで下品扱いしなくても良さそうなものだけ。まあ王族とものなれば、テーブルマナーも厳しいのだろう。そう思いつつ、僕は朝食を黙々と平らげた。

デルフィも普段食べ慣れない庶民の食事に、満足げな様子だった。案外ちよい舌だ。

「おうヒカゲ、デルフィ、おはようさん」

裏口がぱたんと開き、右足の義足を響かせながら社長が姿を見せる。

遠くからは教会の鐘が鳴り響き、庶民の一日のはじまりを告げていた。

「おはようございます、社長」

「お……おはようございます」

僕に続いて、デルフィも洪々ながらといった具合で社長に挨拶する。

社長は豪快な笑みを浮かべつつ言葉を返す。

「なかなか可愛らしい格好じゃねえか。さてデルフィ、仕事をしろと言っても、お前さんには何が何だかサッパリわからんだろう。とにかくヒカゲの横にくっついて仕事を教えてもらえ」

「……この私の教育を、下っ端にさせるといふの？」

「まあそう言うな。ヒカゲ、後は頼んだぞ」

やっぱりか。

「正直、そう言われると思ってましたよ」

「はっはっは、だったら話が早^{はえ}えな。ほれ、もう営業時間ははじまつてるぞ」

社長はデルフィの世話を僕に任せ切りにするつもりなのだろう。

「まあ、そういうことだからよろしくね。まずは朝の予定の確認からするよ。ついてきて」

「ぐぐ……この私がこんな馬の骨の指図を受けるなんて……」

僕はぶつぶつ言うデルフィを気に留めず、店の応接スペースの方へと向かう。

店の入り口正面に設置されたカウンター。この内側が主な仕事場である。

狭いカウンター内には椅子が二つ設置されている。二人が座ると、もうスペースに余裕がないほどに狭い。社長と並んで座ると、圧迫感が凄かったりする。

デルフィが腰を落ち着けてから、僕はカウンター上の予定帳を手取る。

「来客の予定があればここにメモを残しておくんだけど、今日はさっそく予定があるね」

「来客？　そもそも、このお店は何を売るところなのかしら？」

確かに勇者保険とか言われても、彼女にはピンとこないか。

「デルフィは、勇者認定制度のことは知ってるよね？」

「当たり前じゃない。魔物の討伐に行く戦士に準備資金や成功報酬を給付する制度よ。恐ろしい魔物と戦ってくれる人々がいてこそ、国民の安全が成り立つのよ。重要な制度だわ」

「その通り。勇者保険というのは、勇者認定を受けて魔物の討伐に向かう冒険者が加入する保険なんだ。自分が死んだら、指定した受取人に多額の保険金を残すためのね」

デルフィはやや言葉に詰まってから、僕に尋ねる。

「と、討伐に失敗した冒険者は、やっぱり皆死んでしまうのかしら？」

「そんなことはないよ。勝ち目のない魔物と遭遇した場合、普通は無理せずに逃げるから。ただそれでも、逃げ切れずに命を落としてしまうことも当然ある」

デルフィは神妙な表情を浮かべて尋ねる。

「その冒険者が死んでしまったかどうかは、どうやって調べるのよ？」

「確認しに行くんだよ、直接。それが僕の仕事」

「確認って……魔王領に!？」

「うん、そりやそうだよ。……つと、お客さんが来たみたいだね。社長が対応するから、見てるといいよ」

言い終わるのとはほぼ同時に、店のドアがカランと音を立てながら開く。

入ってきたのは、背の高い筋肉質の若者。その後、弓矢を腰に提げた身軽そうな少年が続く。

僕は立ち上がり、予定表に書かれた名前を確認する。

「いらつしゃいませ、ご予約のシェイド様とミック様ですか？」

「はい、そうです」

背の高い若者の方が、軽く頭を下げながら答える。

真面目まじめそうな雰囲気的人物だ。

「そちらでお掛けになってお待ちください。すぐに社長を呼んできます」

店の奥へ社長を呼びに行こうと歩きだす。

しかし社長も来客に気づいていたようで、呼ばれる前にこちらへ来る姿が見えた。

社長は二人の若者の正面に立つと、一礼する。

「ご来社ありがとうございます。さて、まずは勇者認定証を見せてもらいましょうか、シェイ

ドさん」

「はい、こちらに」

シェイドさんが差し出した勇者認定証を、社長が手に取って眺める。

契約をするに当たって、こうした本人確認作業は必須なのである。

「確かに、シェイドさんの認定証ですね。それじゃあ次は、勇者保険の申し込み書類を確認しましょう」

社長は勇者認定証を返し、入れ替わるようにしてシェイドさんが書類を手渡す。

「ふむ……受取人は母親で、保険金額は三万ゴールド、と。そちらの狩人さんも加入希望で、妹さんに一万ゴールドですね。掛け金は一律五分なので、合計二千ゴールドいただきます。討伐中に死亡した場合、うちから受取人に保険金を支払うことになります」

シェイドさんは額うしろきながら、二千ゴールド分の銅貨を差しだす。

「もう準備してあります。よろしくお願いします」

「ありがとうございます。生きて戻った場合はこの半額はお返しますので、必ずまたうちに来てください」

社長は銅貨を僕に手渡してから、再び口を開く。

「討伐計画表によると、今日この後出発ですね。確か三人で行くと聞いていましたが？」

「はい。もう一人は保険に入らないので後で合流予定ですが、治癒魔術師も同行します。ワイ

バーンが相手なので、無傷というわけにはいかないでしょうから」

「ワイバーンの爪はかなり鋭いですからね。注意してください」

「いい装備を揃えましたから、きつと保険の世話になるようなことはありませんよ」

二人の話を聞きながら僕はなんとなく、この人が魔物討伐の初心者だろうと察する。確かに新品の高そうな防具を揃えているが、ワイバーンの爪はそうそう防げるものではない。

……この様子だと、僕も〈ハデス山〉まで調査に行くことになるかもしれない。

ふと、カウンター内で様子を見ていたデルフィが僕の肩をつついて小声で尋ねた。

「ワイバーンって、どんな魔物？」

「体長三メートルくらい、小型の翼竜だよ。たまに王国領まで飛んできて、人間が襲われるから討伐対象になってるんだ」

「ふうん、なるほどね」

「それじゃあ、そろそろ出発します。ありがとうございました」

話しているうちにシェイドさんは立ち上がり、店の外へと歩きはじめる。

「はい、お気をつけて」

しかしもう一人の客であるミックは、カウンター前で立ち止まる。

何かと思うと、突如カウンターに身を乗りだしてデルフィへと声をかけた。

「君、この従業員？　こんなに可愛い子が働いてるなんて噂、聞いたことなかったけどなあ」

「え？ えっとその……」

「討伐が成功したら結構な額の報酬をもらえるから、二人で遊びに行かない？ 美味しいクラベリーパイと紅茶を出す、洒落た店を知ってるんだ」

「あ、遊びに？ えっと、あの、それは……」

デルフィは突然ナンパされて、口をぱくぱくさせて目を泳がせる。そりゃあ、ずっと王宮で暮らしていたならこんな経験はないだろう。

ミックは縮れた金髪を弄りながら、デルフィの反応を待っている。
仕事の邪魔だ。

「そういうサービスはやってませんよ、お客様」

僕は立ち上がり、カウンターを挟んでミックの前に立つ。

「なんだよ、別にいいじゃねえか。邪魔するなよ」

「それよりも、狩人のお客様にお勧めの狩人特約というのがありまして。討伐中に使用した矢の本数分を現物で補填する、大変お得な特約です。これに加入しておけば、討伐中に矢の消費を一切気にする必要もなくなります。それと治療費特約というものもあってですね……」

一気にまくし立てると、ミックはその勢いに押されて一歩下がる。

「そ、そういうのは別にいらねえよ！ まあいい、とにかく討伐を成功させたらまた誘いに来るからな、可愛い店員さん！」

逃げるようにして、そのまま店の外へ行ってしまった。

惜しい、もう少しいてくれれば追加で特約を売れそうだったのに。

振り返ると、デルフィは珍しく機嫌良さそうな笑みを浮かべていた。

「助けてくれるなんて、ヒカゲにもいいところがあるのね。少しだけ見直したわ」

「特約を売り込むついでにね。逃げられちゃったけど」

「つ、ついでですって!? この私を誰だと思っているのよ!」

あつという間に機嫌を損ねてしまった。扱いの難しい王女様だ。

「はいはい、悪かったよ。それよりも、次の仕事があるからしつかり見ててね」

「この私なんて言い草を……。まったく、覚えてなさいよ!」

僕は様々な書類を種類ごとに分類してまとめ、それをデルフィに説明していく。

討伐計画書を束ねたり、勇者認定番号の控えを取ったり、受取人情報を確認したり。

デルフィは相変わず不満そうな表情のまま、僕の説明を聞く。もっともその態度とは裏腹に、僕が指示した作業は要領よくこなしていた。

「どうも、ありがとうございました。お気をつけて」

昼前に来社した別の冒険者一行を見送って、社長が頭を下げる。

彼らも最初に来たシェイドさん達と同様に、勇者保険の契約を結び討伐へ出発した。

当然、先程と同じく契約書類が僕のところに回ってくる。

僕がその整理をはじめようとすると、デルフィが自信ありげな様子で声を上げた。

「さっきと同じように整理すればいいのよね？ それなら、私がやるわ」

「え、もう覚えたの？ じゃあ、やってもらおうかな」

一回の説明で、手順を覚えたと言っても言うのだろうか。まあ、何か間違ったら僕が指摘すればいい。

そう思いつつデルフィの作業を見ていたが、結局最後まで僕が口を挟む必要はなかった。

「ほら、できたわよ。見てみなさい」

どうだと言わんばかりの表情で、デルフィはまとめ終えた書類を僕に手渡す。

その様子を見ていた社長は、感心しながらデルフィに声をかける。

「へえ、たいしたもんじゃねえか。てっきり、王女様はこんな雑務なんてロクにできねえだろうと思っていたけどな」

「失礼ですわ、社長。不本意なこととはいえ、この仕事は我が父から与えられた試練です。完璧かんぺきにこなせば、父もこんな修行など必要ないと考えを改めるかもしれない」

デルフィは起伏の乏しい胸を張って、得意気な表情を浮かべる。

褒められたことがよほど嬉うれしかったのだろう。

昼食を挟み、午後も引き続きデルフィにあれこれ教えながらの書類仕事が続く。

人に教えるという慣れない作業に疲れ、つつい眠気に襲われてしまう。

しかしそんな僕の眠気は、社長からの一声ですぐに消し飛んでしまった。

「ヒカゲ、突然で悪いが一仕事頼む」

「……聞かなくても何となくわかります。調査の前倒し、ですよね」

「察しが良くて助かるぜ。たぶん、今朝のシェイド達は討伐に失敗するだろうからな。苦戦や怪我^{けが}でもしているようだったら、撤退を手伝ってやってくれ」

社長と僕の会話を聞きながら、デルフィはきょとんと首を傾^{かし}げる。

「なんの話かしら？」

「今日最初に来た、二人組のお客さんがいたでしょ。明日の朝から、彼らの安否調査に出發するんだ」

「明日？ そんなに早く調査に行くものなの？」

「いや、普段はそうじゃないね。彼らの帰還予定日は三日後だから、それまでに戻らなければ調査に行くんだ」

「じゃあどうして……」

その問いには、僕より先に社長が答えた。

「俺おれの勘だが、あの連中はおそらく討伐に失敗する。全員若くて経験も少ないし、装備や身のこなしを見ても未熟そうだった」

「見ただけでそんなことまでわかるの？」

「あくまで勘だ、外れることもある。ただ、俺は若い奴やつらをできる限り死なせたくねえんだ。自分の子供と同じような年頃の連中に死なれるのは、このオッサンにはちと辛つらくてなあ」

「でも調査というのは、生き死にの確認をする仕事なのでは？」

社長は首を横に振り、言い含めるような丁寧な口調で答えた。

「もう一つ、大事な仕事がある。それは、討伐に失敗した冒険者の撤退を支援することだ。俺達の仕事で、一人でも多くの命を救う。それこそが、このブレイヴカンパニーを設立した一番の目的であり、俺の信念なんだ」

デルフィは社長の話を聞くと、感心した様子で目を輝かせる。

「素晴らしいことじゃない！ 冒険者をこうして陰で支えるのが私達の仕事なのね！」
と、感動しているところ申し訳ないけれど。

「君もその仕事をするために魔王領に行くんだよ、デルフィ」

「……え？ お、王女であるこの私が、魔王領に？」

「君がここに来た日、国王様も言ってたでしょ。危険な環境に放り込む、って」
目をぱちぱちさせながら、デルフィは社長へと視線を向ける。

「そ、そうなのかしら？」

「まあ、そういうことだ。お前さんは調査員としてうちに雇われた」

「私が、魔王領に……？　き、危険ではないかしら？」

「当たり前だ、魔物の棲む土地なんだから。ただまあ、ヒカゲがついてる。余程運が悪くない限り、死にはしねえだろう」

社長にそう言われても、デルフィは青ざめて不安そうな表情を浮かべていた。

「本当に大丈夫なのかしら……」

「不安そうにしてるところ悪いが、一つ聞いておきたいことがある。お前さん、王族の血筋なら氷結魔法は習得していると考えていいのか？」

「氷結魔法、ですか？」

どこか歯切れの悪い返事。

「王家の血を継ぐ者は、代々強力な氷結魔法を操る力あやつを持っている。お前の母ちゃん、死んだ先代女王のオフィーリアもそうだった。お前もその力を受け継いでいるのか？」

「そ、それは……」

デルフィはしばらく黙り込んでから、絞りだすように悔しそうな声で答えた。

「……私は、氷結魔法の力を継ぐことができませんでした。戦闘の役には一切立つことができないと思います」

「なるほど、わかった。親から魔力を引き継げなかったり、まったく違う性質の魔力に変異することもある希^{まれ}にあるからな」

なんだかわからないが、デルフィはすっかり意気消沈して俯^{うつむ}いている。こんな様子で魔王領に連れていって、大丈夫だろうか。

「さてヒカゲ、とにかく明日からの調査に当たって、デルフィにいろいろと必要だろう。市場に行って、必要な物資を買い足して来い。残りの仕事は俺がやっておく」

「すみません、それじゃあ行ってきます。ついてきて、デルフィ」

うつすらと夕暮れ時に差し掛かった、午後の遅い頃。

市場へと向かう石畳の道を、デルフィは俯いて僕の後をついてくる。

「あのさ、別に社長が言ってたことは気にしなくていいと思うよ。そもそも君を魔物と戦わせるつもりはないから」

「……うるさいわよ、放っておいて」

さっきの話で、社長に心の中の痛い部分をつかれてしまったのだろうか。

しかしデルフィは突然顔を上げると、気丈な声を上げつつ僕の背中をバンと叩いた。^{たた}

「まあ、別にいいのよ！ 魔法なんてうまく使えなくても、王位を継ぐことはできるわ！」

「痛たた……元気になるのはいいけど、僕を叩かないでもらえるかな。それよりも、向こうに

屋台や出店がたくさん見えるでしょ。あれが東地区の市場だよ」

「わ、お、思ったより人がたくさんいて凄い活気ね。市場なんてはじめて来たわ」

この東地区の市場は様々な屋台で溢れている。

食料品や冒険雑貨、武具や魔道具、果ては大道芸の見世物小屋までが雑多に立ち並ぶ。

夕方には大半の店が閉まるので、早めに必要な物を買ひ揃えねば。

「わあ……凄いのね、市場って」

雑貨屋で商品を物色していると、デルフィは市場の熱気に圧倒されて周囲を見回していた。

迷子になったりしないだろうな、この王女様。

「あんまり離れないでね。この人混みではぐれたら見つけるのが面倒だから」

「うるさいわね、子供扱いするんじゃないわよ！」

「ひとまず今買った物を渡しておくよ。小型のナイフに皮の手袋、それと冒険者用の水筒ね。」

次は携帯用の保存食を買いに行かなきゃ」

「ちよ、ちよっと待ちなさいよ！」

デルフィは肩に掛けたケープと青い髪を揺らしながら、小走りで着いてくる。

僕は少し歩いた先にある、乾燥食品を扱う出店を覗き込む。

干したベリー系果実の甘い香り。煎ったクルミやナッツの香ばしい匂い。にお店内に一步踏み入ると、様々な乾燥食品の風味が漂って鼻孔をくすぐる。その中から、無難に味の良い乾燥ラズ

ベリーとクルミを選んで購入。

デルフィはそれを後ろから覗き込みつつ、興味津々といった具合に口を開く。

「そうやって干して乾燥させて、日持ちするようにしてるのね。面白いわね、庶民の知恵は」

「意外と美味しいんだ、これが」

「本当かしら？ ちょっと味見してあげるわ、寄越しなさい」

「保存食なんだから、ダメだよ」

僕が答えると、デルフィはややむっとした表情を浮かべて言う。

「生意気ね、この私を誰だと思っているのかしら？」

「はいはい、もう市場での用は済んだから帰るよ」

「少しはこの私に敬意を払いなさいよ！ 腹立たしいわね……」

適当にデルフィをあしらって、市場の出口へと向かった。

「あれ、デルフィ？」

市場を出て少し歩いたところで、後ろにデルフィの姿がないことに気づく。

振り返って探すと、市場出入り口付近の火吹き芸人に見とれているようだった。あんな珍しい物を見るのはじめてだろうから、仕方ないか。

「行くよ、デルフィ！」

僕が声をかけると、小走りで慌ててこちらに向かつてくる。しかし、市場出入り口に立っていた警備兵が突如デルフイに声をかけた。

「この辺りじゃ、あまり見かけた覚えのない素敵なお嬢さんだな。よければ俺が家までエスコートしよう」

デルフイは唐突な出来事に困惑して立ち止まり、おろおろと視線を泳がせる。

「え、えつと……」

「おつと、兜を着けたままじゃあ失礼だったかな」

兜を外した警備兵の横顔を見て、僕は溜息を吐きだしてしまう。あまり会いたくはない類の知人だったからだ。

「……やあ、カイル。久しぶり」

後ろから声をかけると、その警備兵カイルも僕の存在に気づく。

「ああ？　なんだヒカゲじゃねえか。王立学校の卒業以来か？　まあどうでもいい、俺は今このお嬢さんに用があるんだ。てめえは邪魔だから消えろ」

カイルはデルフイの腕を掴んで、強引に自分の方へと引き寄せる。

「や、やめなさい、無礼な！」

「へへっ、まあそう言うなよ。ここで会ったのも何かの運命ってやつさ」

どうやらデルフイはこういう軽薄そうな男に随分もてるらしい。

僕は軽く咳払いをして、カイルに声をかける。

「悪いけどその子はこちらの後輩で、まだ仕事申だから早く戻らなきゃいけないんだ」
「うるせえな。臆病者の子供は黙って一人で帰ってろ」

カイルのその言葉に、デルフィが首を傾げて声を漏らす。

「臆病者の子供？」

「知らないのかよ、お嬢さん。こいつの父親は、悪名高いあの臆病シーフなんだぜ」
「聞いたことがないわよ、そんな話。……いいから手を離してちょうだい」

カイルはデルフィの腕を離し、僕に見下すような視線を向けてから口を開く。

「レティス様が魔王を倒した後のことだ。魔王軍の残党が報復に来て、ドラゴンが城壁のすぐ外に迫ってきた。兵団が全滅の危機に陥ったその時、こいつの父親がどうしたかわかるか？」

「聞いたことがない、と言ったでしょう」

デルフィの言葉には苛立ちの色が混じっていた。それに構わず、カイルはさらに続ける。

「なんと一人で逃げだした挙句、踏み潰されたんだぜ。一方で、勇者レティス様がドラゴンを倒して大勢の兵士が命を救われたんだ。それ以来、こいつの父親は王国中の笑いや、つてわけだ」

カイルはにやにやと、馬鹿にするような笑みを僕に向ける。

「そんな臆病者の子供も、ロクな奴じゃないに決まってるだろう？ さあこんな奴は放ってお

いて、この後俺と食事でも……」

パシン！

乾いた音が突如響き渡る。

それは、デルフィが右腕を振り抜いてカイルの頬を叩いた音だった。

間髪入れず、デルフィは気丈に言い放つ。

「王国の兵士は、命を懸けて民衆を脅威から守るために存在するものよ！ 国民を愚弄するような発言をしたり、女性に対して無礼な行いを働くなど、恥を知りなさい！」

あまりに想定外の行動に、僕もカイルもしばし固まってしまふ。

「こ、この俺に手を……」

カイルは怒りに打ち震えていたものの、なんとか堪えたようだった。僕とデルフィを睨みつけてから兜を被り、元の位置に戻っていく。

気丈にもデルフィは睨み返していたが、これ以上焚きつけられては面倒だ。

「行くよデルフィ、早く」

「ヒカゲは悔しくないの？ あんな男に父親のことを悪く言われて」

「……どうだろう。父さんが一人で逃げだしたのは事実らしいから、何も言い返せないよ。そろそろ戻らないと社長も心配するから、少し急ぐよ」

「あ、ちょ、ちょっと、歩くのが速いのよ！」

店に帰り着いたのは、空も暗くなりはじめた夕方遅く。

既に社長が営業を終えて、片づけも済ませてくれていた。

「明日は朝から調査に出発だからな、二人とも早く休め。風呂ふろも沸かしておいたぞ。おいデルフィ、粗末そまつな狭い浴室だが一人で入れるな？」

「……一人で入る以外の選択肢があるとは思えませんか」

「別にヒカゲと入ってもいいんだぜ？」

「下品ですわ社長！」

そんな二人のやり取りをよそに、僕は物資を整理して明日の荷物を淡々と用意する。

今までは、凄腕の戦士であるリゼッタさんを頼りにしていたところもあった。しかし、明日はそうはいかない。デルフィを連れて魔物を避けながら、〈ハデス山〉のワイバーンの巣周辺まで向かう。

……大丈夫かな。

「いつも通り、明日は夜明けに合わせて馬の手配をしておくぞ。……って、随分浮かない顔してんな。どうかしたか？」

浴室に向かったデルフィを見送ってから、社長が尋ねる。

「いえ、大丈夫です。明日は早朝に出発しますので、店をお願いします」

「俺がお前くらいの年頃だったら、命を懸けてでも風呂を覗きに行つたもんだがなあ。ま、とにかく仕事の面に關しちゃ、俺はお前を全面的に信賴してる。デルフィのことも任せたぞ」

「仕事ですからね。そこはしっかりやります」

「おう、頼んだぞ。それじゃあお疲れさん」

社長は力強く僕の肩をバシンと叩き、店の外へと姿を消した。

そして迎えた翌朝。

まだ薄暗い時間に僕は目を覚まし、ソファから身を起こす。

程なくして、店の外から馬の蹄の音が近づいてくるのに気づく。魔王領の調査に行く時は、社長がこうして馬を手配してくれるのである。

「さてと、デルフィは起きてるかな」

二階へ上がりドアをコンコン叩くと、少しの間を置いて眠そうな声が返ってくる。

「ん、もう少し寝かせてよ、ケイト……」

「残念ながらケイトさんじゃないし、もう少し寝かせるわけにもいかないんだ」

ドアの向こうから、がばりとデルフィが飛び起きた気配が伝わってくる。

「なっ、い、今のはその、違うわ、聞かなかったことにしなさい！」

「すぐに起きてくれれば、聞かなかったことにするけど」

「うう……まだ外は暗いじゃない。とにかくわかったわよ、起きるわ。そ、それよりも、着替えるんだからそこにいられたら困るわ!」

「着替えたら、荷物を持って下に来て。すぐ出発するから」

僕は下に戻り、待っている間に林檎りんごを口にしながら荷物を再確認する。

火打ち石、ナイフ、皮手袋、折りたたみ式小鍋等の、野営必需品。

乾燥果物やナッツ等の携帯食料、水をいっぱいに入れた皮製水筒を二つ。

清潔な手拭ぬぐいを数枚、傷薬、包帯、フック付きロープ。

そして生命線である装備品の、銀製のナイフに投げナイフ十数本。

〈ハデス山〉まで行つて帰るだけであれば、これで十分だろう。

「準備できたわよ、ヒカゲ」

二階から下りてきたデルフィが、ひよつこりと顔を覗かせる。

「それじゃあ軽く食事を済ませたら、すぐに出発するよ」

皿に載せた林檎を差しだすと、デルフィはひょいと手に取って口に運んでいく。

「何よこれ? 随分地味なロープね」

出発前にロープを手渡すと、デルフィは怪訝けげんそうに首を傾げる。

「これは特殊な加工がしてあって、雨を弾くし夜の寒さもしのげる優れたものなんだ。そんな普段着のまま魔王領に行ったら、大変だよ」

「ふうん……なるほどね」

デルフィはブラウスとスカートの上からローブを羽織り、袖を通す。

少しサイズが大きめで、ぶかぶかといった印象を受ける。

しかし、店の備品で一番小さいサイズのものがこれだ。つくづく、デルフィが小柄な少女だということを痛感する。

「それじゃあ行こう。表に馬が用意してあるから」

「う、うん、わかったわ」

やはり緊張しているのか、デルフィの表情はやや硬かった。だが出発が遅ければ、それだけ調査の行程に支障が出てしまう。

僕は店に繋がれていた若い馬の紐をほどき、その上に乗る。

「デルフィ、後ろに乗れる？」

「乗馬の訓練は受けているから問題ないけれど……と、殿方の後ろに乗った経験はないわ。後ろに乗るってことは、その、体が密着するのでは？」

「そりゃあ、しつかり掴まっていと危ないからね」

「婚礼前の女性が殿方の体に抱きつくなど、はしたないわ！」

さすがは王族、貞操教育もしっかりしているのね。と言っても、冷静に考えたら僕も女の人に密着された経験なんてなかった。

「仕事だから、いろいろと我慢してもらうよ。国王様の命令でしょ」

「う、うう……いずれお父様にはたっぷり文句を言わせてもらおうわ……」

デルフィはそう言っていると、鞍に足を掛けて勢いよく後ろへと乗り込んだ。

腰に両手を回したのを確認してから、僕は馬の手綱を握り締める。

「出発するよ。しっかり掴まってね」

城下町の北方面に続く道へと、馬を走らせはしめる。この町の最北端が、魔王領との境目である〈タナ川〉へ出る城門への近道なのである。

「近くで見ると、城壁って結構高いのね……」

馬を走らせていると、デルフィが僕の後ろでつぶやいた。

「魔物を食い止めるための壁だからね。低すぎたら大変だよ」

店を出発して十数分あまり。夜明けの空は陽が昇るにつれて明るさを増していく。

城下町の出入り口にあたる門は、すぐ目の前まで迫っていた。この北側の城門には、早朝であつてもよろい鎧を着込んだ兵士が何人も警備に当たっている。

僕は門の手前で馬から下りて、デルフィにも手を貸して馬から下ろす。

門の脇には、顔見知りの警備兵が一人。

「おはようございます。契約者の安否調査に向かうので、開門をお願いします」

「ああ、ちょっと待ってください。……あれ、確かいつもは金髪の姉ちゃんが一緒だったよな？」

警備兵はデルフィへと訝^{いぶか}しげな視線を向ける。

これまでは重装備に身を包んだリゼッタさんが同行していた。それが、突然軽装で小柄な女の子に変わっているのだ。不思議に思うのも当然だろう。

「リゼッタさんは先日退職したんです。こっちはうちの新人社員で、デルフィといいます。これから魔王領の調査を担当しますので、よろしくお願いします」

僕が言うのに合わせて、デルフィはフードを深く被りつつ頭を下げる。

「へえ、こんな女の子がねえ。馬はいつも通りここで預かって、貸しだし屋に返しておくよ」
ギイ、と音を立てて城門が開かれる。

「いつもすみません、助かります」

門の外に出ると、雑草が生い茂り荒れた大地が僕達を出迎えた。

「これが、城下町の外……。この先が魔王領なのよね」

デルフィは立ち止まり、微^{かす}かに震えた声を上げた。

僕が歩きだしても、立ったまま動こうとしない。

「どうしたの？」

「わ、わからないわ。ただ、思うように足が動かなくて……」

恐怖のため、その一歩目が踏みだせないのか。

「今ならまだ引き返せるよ。ここから先は、君の言う通り魔王領が広がってるんだ。本当に死ぬ可能性だってある」

「……嫌よ。ここで引き返すことは、王の座を諦めるあきらのと同じ。私はね、絶対に王座に就く。兄様や姉様にも、決して負けない。この試練は、必ず乗り越えるわ!」

言い終わると、デルフィは息を深く吸ってようやくその一歩目を踏みだした。

「わかった、それじゃあ行こう。それだけ覚悟しているのなら、弱音は吐かないでね」
「うるさいわよ! さつさと歩きなさい!」

正直、我が儘でやかましいだけの王女様かと思っていた。でも、彼女なりの信念や譲れない思いがあるのかもしれない。

「……広い川ね。ひよっとしてこれを渡るのは?」

「うん、その通り。ちょうどいいボートは……っと」

〈タナ川〉。この穏やかで広い河川が、王国と魔王領の事実上の国境になっている。

王国の冒険者は、これを渡って魔物討伐に向かう。逆に、魔物がこれを渡って王国にちょっかいを出してくることもある。

「よし、あれに乗ろう」

ちように頑丈そうなボートを発見し、そちらへ向かっていく。

ここには、冒険者のためにいくつもの木製ボートが停められているのである。

「だ、大丈夫なの、こんな木のボートで？」

「転覆なんてしないから大丈夫。ただ、この辺りは人食いアリゲーターが出るから、水面に怪しい気配があったら教えてね」

「ひ、ひひ人食い!？」

不安そうなデルフィの表情とは対照的に、終始水面は穏やかなままだった。

特に魔物に襲われることもなく、無事向こう岸へと渡り切る。

「ね、平気でしょ？」

「……寿命が三日分くらい縮んだ気分よ」

それくらいで三日も縮んでいたら、この後で何年分の寿命が減ることになるだろうか。

などと考えながら、僕は魔王領の簡易地図を広げていく。

「これからの調査行程を説明するよ。今僕らがいるのがこの川岸で、ここからしばらく平原が続くんだ。平原と言っても、あちこち岩や草地だらけだけどね」

「ふうん、これが魔王領の地図なのね」

デルフィが地図を覗き込む。

「平原を抜けると、西側には〈魔獣の森〉が、東側には〈ハデス山〉がある。北にある〈魔族の谷〉には、文字通り様々な魔族の集落がいくつも点在しているんだ」

ひとしきり魔王領の説明をしていると、デルフィが首を傾げつつ言う。

「そもそも、七年前に魔王はお父様が倒したはずよね。どうして今も魔物が統率されたまま、勢いを失っていないのかしら？」

「それはまだ、わかってないんだ。おそらく何者かが新しい魔王になったんだろうと言われているけど」

「うーん、将来の女王としては気になる話ね」

デルフィは神妙な表情を浮かべるが、呑気^{のんき}にここで立ち止まっている場合ではない。

「今回の仕事は、〈ハデス山〉中腹へワイバーン討伐に向かった冒険者の、安否確認だね。彼らの討伐ルートを追って、生き死にを確認するんだ」

「そ、それはわかったけど……。この平原には魔物はいないのかしら？」

デルフィはやや怯^{おそ}えた様子で、荒れた魔王領の大地を見渡す。

「この辺りでよく見るのは、野生の魔獣の延長みたいな魔獣がほとんどだよ。暴れ水牛とか殺人カバとか、人食いアリゲーターとかね」

「そ、そうなの!? だ、大丈夫なの?」

「多分ね。一応デルフィも警戒しておいて」

僕は小高くなっている岩場の上に登り、身を低くして周囲をぐるりと見渡す。

シーフとして、小さい頃に父さんから叩き込まれた技能の一つ、千里眼。

まあ要するに、遠くまでよく集中して魔物の気配を察知するだけのスキルだけれど。

動く物の気配、魔獣が発する独特の殺気、風に乗って来る微かな匂い。

それらを頼りに、僕は平原に点在する魔物の大まかな位置を把握する。

「……うん、このまま真^まつ直^すぐ〈ハデス山〉に行こうとすると、殺人カバと出くわすかも。ほら、遠くでのそのそ歩いているのが見えるでしょ」

「え？ うーん……あつ、本^{ほん}当^{とう}だ！ あんな遠くにいるのなんて気づかないわよ、普通」

「西側寄りに迂回すれば、あの魔獣をやり過^すごして〈ハデス山〉の麓^{ふもと}に行けると思う。ただ、途中で別の魔獣と遭遇しないとも限らないから、慎重に行動するよ」

「な、なんだか気が遠くなってくるわね」

何しろリゼッタさんが同行していた時とは勝手が違う。

デルフィを守りながら進んでいくには、極力魔物を避けて行動しなければならない。

「ね、ねえ、結構歩いたけど山は随分遠いわね」

歩いていると、デルフィが息を切らしつつ声を上げた。

「〈ハデス山〉の麓まで、このペースだと半日近くかかるから。魔物を避けるために遠回りを

する必要もあるしね。まあ、日没までに麓まで到着する予定だから、慌てなくても大丈夫」

「へ、に、日没？ 日帰りじゃないの？ 夜はどうするの？」

「そりゃあ、野営するんだよ。夜は本当に真っ暗で、行動できないからね」

デルフィは絶句して目をぱちぱちさせる。

「嘘うそでしょう？ な、何か宿とか、山小屋とか、そういう安全な場所があるのよね？」

「ないよ。もしあったとしても、ゴブリンやオークが真っ先に襲いに来るだろうね」

「じゃあつまり、私はこの魔王領の壁も屋根もない野原で、ヒカゲと一晚過すごすの!？」

「まあ、そういうこと」

僕の答えに、デルフィは呆然ぼうぜんとしたまま言葉を失ってしまう。

しかし今は、そんなことに気を配っている場合ではない。うっかり魔物の気配でも見落としたら大変なのである。

そうして時折休憩を挟みながら、魔物に見つからないよう注意を重ねつつ歩き続ける。やがて、なんとか魔物に遭遇することなく《ハデス山》の麓付近まで到達した。

「ちよっと……はあ、はあ……休むのはどうかしら」

あと一息で今日の野営予定地に着くところで、デルフィが膝ひざに手をつけて足を止めた。

そろそろ太陽も夕方に近い位置まで傾きつつある。暗くなる前に野営地を確保しないと、動

けなくなってしまう。

とはいえ、はじめて魔王領を歩く彼女の疲労も相当なものだろう。無理は禁物だ。

「少しだけだよ。陽が落ちるまでに野営地を確保しないといけないから」

「わかったわよ。はあ、もう脚がパンパンよ……」

デルフィは近くに生えていた樹に背を預け、腰を下ろす。

膝を立てた無防備な座り方で、疲労のためかローブが捲れているのに気づいていない。そのせいで、太ももが際どい辺りまで露出してしまっていた。お姫様のくせに随分とはしたない格好である。

「そんな格好してると見えちゃうよ」

「ふえ……見えるって何が……っ!?　　~~~~っ!」

僕の指摘に気づいたデルフィは、面白いくらいに顔を真っ赤に染め上げる。

すぐに左手でローブを押さえて足を隠すと、同時に右手を高く振り翳した。

バシヤア!

ほとんど不意打ちだった。

突如僕の眼前に水の塊が出現したかと思うと、それが勢いよく降りかかった。

水?　手元に水筒もないのに、どこから?　周囲には水源も見当たらない。

「あ、あああ、もう許せないわ!　私が王位を継承した暁には、最初に実施する政策はあんな

の打ち首よ！」

「……今の水は君が出したの？」

「話を逸らすんじゃないわよ！ このドスケベシーフ！ とうとう本性を現したわね！」

むしろドスケベなら、見えそうなことを指摘せず観察し続けるのではないだろうか。

「デルフィが女王様になったら、好きなだけ僕を打ち首にして構わないから。それで、今の水はなんだったの？ デルフィの魔法？」

「そ、それは……。見せるつもりはなかったのに、つい怒って無意識に出してしまったわ。どうせあんたも、兄様や姉様と同じように馬鹿にするんでしょう！」

「馬鹿にする？ どうして？」

「兄様も姉様も立派に氷結魔法を習得したのに、私だけ氷ではなく水しか出せないのよ！ 味方を守る氷壁も、敵を貫く氷柱も作りだせない、役立たずの落ちこぼれ魔法よ！」

俯いて震えた声で、デルフィは吐き捨てる。

なるほど。氷結魔法は王家の血筋だけに伝わる、貴重で強力な魔法だと聞いたことがある。だからこそ、異質な自分の魔力に誇りを持ってないのだろう。

「そんなふうに考えなくてもいいと思うけど。水を生みだす魔法なら、氷結魔法とは違った使い方がいくらかもあるでしょ」

「……ヒカゲにはわからないわよ。敬愛するお母様の魔力を受け継ぐことができず、魔物と戦

う術すべを持たない私の無念さは。兄妹で一人だけ異質な落ちこぼれ扱いされる、私の気持ちは「そりゃまあ、君の気持ちはわからないけどね。ところで、その水って飲んでも平気？ お腹なかは壊さない？」

「失礼ね！ 混じりつけなしで、喉越のどしすつきり爽さわやかな美味しい水よ！」

むっとした表情でデルフィは答える。

「だったら、凄く価値のある魔法だよ。魔王領では飲み水の確保は重要だし、怪我した時に傷口をすぐ洗えるのも大きい。氷結魔法よりもはるかに柔軟性があつて、便利な魔法だと思う」

「な、何よ、皮肉でも言っているのかしら？」

「この仕事を続けていれば、君の魔法が役立つ場面はいくらでも出てくると思うよ。さて、そろそろ休憩も終わりにして……」

出発しよう、そうデルフィに告げようとしたその瞬間だった。

背後から、微かに何かが動いたような物音。魔物特有の血生臭い殺気。

デルフィの肩を掴んで強引に伏せさせて、その勢いのまま太い樹の背後に身を隠す。

「きゃあつ！ 突然何よ!？」

タァン！

デルフィがそう声を上げると同時。

木製の矢が飛来して、樹の幹に突き刺さった。

デルフィは驚いて言葉を失い、表情を恐怖の色に染める。

僕は樹の陰から、矢の飛んできた方向を窺う。そこには、岩陰からこちらの様子を見ている人型の何かが二つ。

緑色でざらざらした感じの皮膚。ずんぐりした人間の子供くらいの体型。不自然に吊り上がった邪悪そうな目つき。

「……ちよっと気を抜きすぎたかな。ゴブリンに見つかったみたいだね。石斧持ちが一匹、弓矢持ちが一匹いる」

「え、ゴブリンって、確か下級魔族で人間を食べるって聞いたことが……」

「うん。魔族も魔獣も、魔物は皆人間が好物だからね」

ここまでうまく避けてきたけれど、とうとう魔物に見つかってしまった。

デルフィは怯えた様子で声を震わせる。

「は、早く、逃げないとっ……」

「いや、あのゴブリンはここで仕留めよう。仮に逃げ切れても、後で仲間を呼ばれて探しに来られたら、本当に大変なんだ」

「で、でも相手は魔物でしょ!? ヒカゲがあんなのと戦えるようには見えないわよ!」
そんなに頼りなく見えるのだろうか、僕は。

「まあ、戦い方にもいろいろあるから」

僕はローブの内側に固定していた銀のナイフを、鞘から抜き取る。

そしてゴブリンの動きに注意しながら、樹の陰から歩いて出ていく。

「ちょっとヒカゲ、危ないわよ！」

「デルフィはそこから動かないで」

姿を見せた僕に対して、ゴ布林達はほとんど警戒していないようだった。

石斧を持ったやつは、僕の方にはずかずかと歩み寄ってくる。もう一体は、弓に矢をつがえて構えを取る。

なるほど、ゴ布林から僕も僕は弱そうに見えるらしい。

リゼッタさんと行動していた時は、ゴ布林なんて大抵勝手に逃げていったけど。

あれはリゼッタさんだけを怖がっていたのか。と、余計なことを考えている場合ではない。弓矢を持ったゴ布林が、強い殺気を放つ。

次の瞬間僕は地面を蹴^けって駆けだし、身を屈^{かが}めて横に飛び退く。

放たれた矢はヒュウ、と空を切ってすぐ横を飛んでいく。

僕はそれを合図に全力で駆けて、石斧を持ったゴ布林へと切りかかる。

「ギギッ!？」

想定外の動きだったのだろう、そのゴ布林は慌てた様子で唸^{うな}りを上げる。

それでも怯^{ひる}まずに僕を迎え討とうと、石斧をぶんぶん振り回す。



大振りなその攻撃を二度、三度と僕は身を屈めて回避。

そしてがら空きになった脇腹に、銀のナイフを素早く突き立てる。

ざくっ

間髪入れずナイフを引き抜くと、赤黒いゴブリンの血が傷口からどぷりと溢れだす。

ゴブリンは痛みに呻き^{うめ}を上げるが、当然この程度では致命傷にならない。

しかし構わず僕はそいつを放置して、弓矢ゴブリンの方へ続けざまに駆けていく。

「ギ……ギイツ！」

醜い叫びと同時に、弓矢を持ったゴブリンは背を向けて逃げだす。

残念ながら、逃がしたら仲間と呼ばれて厄介^{やっかい}なので容赦^{ようしや}はしない。

投げナイフを一本手に取り投擲^{とうてき}すると、弓矢ゴブリンの左肩に命中し突き刺さる。当然この程度で致命傷は与えられない。通常であれば。

「ギ、ギイイ……」

しかしそのゴブリンは、ひどく苦しそうな鳴き声を上げる。

程なくして足を止めその場にうずくまり、地面へと横たわってしまふ。

先に切りつけた石斧持ちのゴブリンも同様に、倒れ込んでいた。

二匹ともそのままびくびく痙攣^{けいれん}し、まったく身動きが取れなくなっている。

「デルフィ、もう出てきて大丈夫だよ」

「……いったいどうなってるの？ ゴ布林ってこんな軽い傷で動けなくなるの？」

「ゴ布林は人間よりはるかに頑丈で、こんな掠り傷なんてダメージのうちに入らないよ」

「でも、現に倒れて動けなくなってるじゃない！」

「僕のナイフには、特製の強い神経毒を塗ってあるんだ。ゴ布林程度なら、丸一日くらいはこのまま動けないと思う」

「そ、そうだったの。……なんだか卑怯^{ひきょう}ね」

デルフィは素直な感想を呟きながら、倒れたゴ布林をまじまじと眺める。

「こんな目立つところに転がっていると、仲間のゴ布林が寄ってくるかもしれない。その岩陰に運んでおこう」

僕はゴ布林の腕を掴んで、二体とも引きずって運んでしまう。

その小ささの割に体は重たく、これだけでも一苦労だ。

「こ、殺さないの？」

「ナイフに血がこびりついて切れ味も毒の効果も低くなるし、時間の無駄にもなるからね。仕事を効率的にこなすには、いちいち片づけた魔物にとどめを刺すわけにもいかないんだ」

「そっか、そういうもののね……」

「さてと、これ以上ここで時間を潰すわけにもいかないよ。早く〈ハデス山〉の麓まで行って野営地を探そう」

「どの辺りで野営するのがいいかな……っと」

僕たちは陽がまだ落ちる前に、予定通り〈ハデス山〉の麓に到着した。

この周辺は木々が雑然と生い茂っており、野営に適した地形を見つけやすい。

魔王領への冒険者は、たいていこの辺りで野営するのである。

僕は周囲を見回しはじめたところで、ふと上空に何かの羽音を感じて空を見上げる。そこには銀色の体を空に飛翔させた、ワイバーンらしき姿が見えた。

「デルフィ、ちょっとこっちに来て」

デルフィの腕を引つ張って、すぐに樹の陰に身を隠す。

ワイバーンにはこちらに気づいた様子はない。二匹、いや三匹ほど飛んでいるようである。

「ひよっとして、あの飛んでるやつがワイバーンなの？」

「うん。でも、あんなに活発なワイバーンは見た覚えがないよ。……何か探しているのかな。

例えば、人間とか」

「ちよっと、脅かさないでよ！」

「大丈夫、戻っていったみたい」

日没も近いめだろう、ワイバーン達は山の中腹辺りへと飛び去って、姿を消した。

あれだけ興奮した様子なのは、おそらく人間と一戦交えたばかりである可能性が高い。

さしずめ、仕留め損ねた人間を捜し回っている、といったところだろうか。

「……シェイドさん達が無事ならいいんだけど」

僕は再び、野営に適した場所を探すべく周囲を探索しはじめた。

「ねえちょっとヒカゲ、本当にこんな場所で夜を明かすつもりなの？」

藪と岩場^{やぶ}に囲まれた一角で野営準備を進めていると、デルフィが不満げに声を上げた。

「むしろここは理想的な野营地だよ。多少雨が降っても、木の葉が屋根代わりになってくれるだろうし」

僕は落ち葉をばさばさと一カ所に集中させて、天然のベッドを作りながら答える。

デルフィはその作業を眺めながら、不安そうに目を細める。

「魔物が襲ってきたりはしないの？ 藪に囲まれて目立たない場所とはいえ、人間の気配がしたら寄ってくるんじゃないの？」

「確かに、その可能性はあるね。この辺には巨大毒ネズミやデビル山猫みたいな、野生の魔獣が生息してるから。ただ、僕にはこの魔法があるから大丈夫。……《ディハイド》！」

デルフィは次の瞬間、きよろきよろと周囲を見回しだす。

「え？ あれ!? ちょ、ちょっと、ヒカゲ、どこに消えたのよ!」

別に消えたわけではない。目の前にいるはずの僕が、一切知覚できなくなっているのだ。

それが、『ディハイド』の効果。

「ね、ねえ、本当にどこよ？　まさか、こんなところに私を一人で放りだす気じゃないわよね！」

ひどく不安げに眉をひそめ、左右を見回して声を上げる。
ちよつと可哀想かわいそうになつてきたので、この辺にしておこう。

『ディハイド』で作つた薄い膜を軽く押すと、それは一瞬で霧散する。

同時に、デルフィは僕の姿に再び気づいて不思議そうに青い瞳ひとみを瞬かせる。

「あ、あれ？　いつの間に戻つたの？」

「僕はずっとここにいたよ。今のが、僕の隠密魔法『ディハイド』。この魔法で魔力の膜を張つたら、その内部にいる限り外側からは知覚できなくなるんだ。音も匂いも、遮断しやだんされる」

「それなら先に説明しなさいよ！　突然消えてビックリしたんだから！」

「わ、悪かつたよ。とにかくこの魔法を使えば、近くに魔物が来ても気づかれないんだ」
僕が説明しても、まだデルフィの怒りは収まらないようだった。

「だいたい、そんな便利な魔法があるなら平原を歩く時常に使いなさいよ！」

「この魔法は一度張つたらその場から動かせないんだ。それに、一日に張れる回数にも限度がある。使いどころは慎重に考えないといけないんだ」

「……も、もう、微妙に使えない男ね」

デルフィはぷいと不機嫌そうにそっぽを向いてしまう。

そうして話している間に、僕は枯葉を一カ所に大量に敷き詰め終える。その上に大きめの手拭いを広げて、野営用簡易ベッドの完成。

焚き木も集め終えたし、これで野営準備が完了した。

「《ディハイド》」

僕は樹と藪に囲まれたその一角を覆うようにして、魔力の膜を広げる。

「なるほど、薄らと膜^{うつつ}みたいなのがあるわね。これで外側から見えなくなっているの？」

「うん、そういうこと。大声で歌おうが、中で火を起こそうが、どんなに敏感な魔獣にも気づかれないよ」

「へえ、面白い魔法ね」

「デルフィは先に寢床で横になって休んできるといいよ。当分は僕が見張ってるから」

僕は周囲から集めた石を並べて、即席の竈を作り火起こしの準備をする。

火打ち石で枯れ草に火をつけていると、デルフィが声を上げた。

「……今さらだけどヒカゲ、私は王女という立場なのよ!? そんな私が男性と二人でこんな狭いところで一夜を過ごすなんて、とんでもないことなんだから!」

「それじゃあ、ここに《ディハイド》を張ったままにして、僕は離れたところで野営しようか?」

「な、何を言ってるの！ この私を守る大事な義務があなたにはあるでしょう！」
どうしろと言うのか。

と、困り果てているうちに竈に火が燃え移り、周囲が明るく照らされる。

ちよと陽が落ちて暗くなっていたので、焚き火の明かりが心強い。

デルフィは溜息を吐いてから、枯葉ベッドへこてんと身を横たえた。

「信じていいのよね」

「君を守るのは僕の仕事だからね。ところで、ちよとこの鍋に水入れてくれない？」

「王女様を便利屋扱いするなんて、いいご身分ね」

デルフィはぶつくさ言いながらも軽く手を翳す。

鍋の中にはしゃりと水が放り込まれ、そこにドングリや野草を入れて竈に載せる。

「実際、便利な魔法だからね」

「なんだか腹立たしいわ……。ところで何やってるの、ヒカゲ？」

「夕食の準備だよ。乾燥果実やナッツ類は貴重だから、野営時の食事はできるだけ現地調達するんだ」

「夕食って、そこらに落ちてたドングリや適当に採った葉っぱじゃない！ おままごとじゃないのよ!？」

「ドングリも野草も、軽く火を通せば食べられる種類のものを採ったんだ。まあ、準備ができ

るまでまだかかるから、休みながら待ってて」

デルフィは懐疑的な視線を向けながら、調理の様子を横になって眺める。

程なくしてドングリが茹で上がり、ナイフの柄で一つずつ殻を叩き割っていく。

そんな地道な作業を黙々と続けていると、デルフィがふと口を開く。

「ねえ、ヒカゲはどうしてそんなに魔物の対処や野宿に慣れているの？」

「物心ついてからは、よく父さんに連れられて魔王領で野宿してたんだ。その時に、魔王領の地理や魔物の特徴、水や食料を補給できる場所なんかを叩き込まれた」

「子供が魔王領で野宿なんて無茶苦茶ね……」

半信半疑、といった具合にデルフィは目を細める。

「小さい頃に母さんが死んで、他に身寄りもなかったから。父さんは、僕が一人で生き抜く術を早いうちに教えてくれたんだと思う」

「お父様から聞いたことがあるわ。昔、凄腕のシーフが仲間 にいた、って。七年前の魔王軍との戦争で亡くなったとも。ヒカゲのお父様のことよね？」

「死んだ時の話は、この前市場でカイルが言った通りだよ。……父さんが生きてた頃は、僕もシーフという職業に本気で憧^{あこが}れてただけだね。今は、シーフと言えば臆病者の代名詞だよ」

僕は話しながら、淡々とドングリの殻を割り続ける。

不意にデルフィは枯葉ベッドから体を起こし、僕の横に座る。

「どうしたの？」

「本当に食べられるのよね……えいつ」

かけ声とともに、意を決してドングリを口に放り込みカリカリ咀嚼する。

「……あら、意外と食べられる味なのね。これが食べられる種類だということも、お父上から教わったのかしら？」

「うん、そうだけど」

「良いお父上じゃないの。まったく、ちょっと世間の人々に悪く言われたくらいで、そんなにじた態度を取るものではないわよ。ほら、もっと速く殻を割りなさい！」

デルフィはひよいひよいとドングリをつまんで食べていってしまう。

ひよっとして、この子なりに僕を慰めようとしてくれるのだろうか。

「僕の分も少しは残しておいてね」

そう呟いてから、僕はまたドングリの殻を割る作業に集中する。

全て殻を割り終えると、二人で焚き火を囲んで慎ましやかな夕食の時間になる。

デルフィは野草にも挑戦したものの、「苦い！」との一言でその後は手をつけなかった。

「ん……んん……すう」

夕食を終えるとデルフィはうとうと目を細めて横たわり、眠ってしまった。

僕は自分のローブを脱いで、デルフィの体に掛ける。

その際、少しだけその寝顔が間近で見えてしまった。

普段の生意気そうな表情のない、無防備なその寝顔に胸をどきりと高鳴らせてしまう。

……いやいや、僕はケイトさんのような少し年上の綺麗なお姉さんが好みなのだ。

「まあ、しばらくは寝かせてあげるよ」

いくら《ディハイド》で外からは感知できなくなっている、完璧とは言えない。

例えば魔獣がここを通ろうとして、膜にぶつかってばったり遭遇、なんてこともある。無警戒に眠りこけるわけにはいかないのだ。僕は夜が更けるまで、焚き火の前で見張りを続けた。

魔王領の暗く静かな夜が、ゆつくりと深まっていく。

星の位置から、夜明けまで二〜三時間といった頃合いに僕はデルフィを起こす。

「むにゃ……もう朝かしら？」

「朝まではまだ少しあるね。申し訳ないけど、見張りを代わってもらえるかな。何かあったら僕を叩き起こして構わないから」

「見張りって……ヒカゲあなた、ずっと起きてたの!？」

デルフィはがばりと飛び起きる。

「代わってあげるから早く寝なさいよ、まったくもう」

「悪いね。夜明けになったら起こして」

そう伝えて僕は枯葉ベッドへ横たわり、短い睡眠へと落ちていった。

「ヒカゲ、起きなさい。夜が明けたわよ」

ゆさゆさと体を揺らされる感覚に、眠りから無理矢理起こされる。

どうやら無事夜明けを迎えられたらしい。

「おはよう、デルフィ。ごめんね見張りなんてさせちゃって」

「……夜の闇ぐみって、あんなに暗いのね。王宮の外で夜を明かしたのは、生まれてはじめてよ」
デルフィの話を聞きながら、僕は野営の後片づけをはじめ。焚き火の跡を土で埋め、ベッドに使った枯葉を散らす。そして《デイハイド》で張った魔力の膜を軽く押して、解除する。

「今日はこのまま《ハデス山》を、ワイバーンの巣に向けて登っていくよ。シェイドさん達のパーティーの痕跡こんせきを探しながらね」

「わかったわ。無事にワイバーンを討伐できているといいわね」

「この後の調査に時間がかかると、もう一泊野営が必要になるからね」

「うう、さすがに早く帰ってお風呂に入りたいわ。早く行くわよ、ヒカゲ」

僕は荷物を背負い直して、夜明けのひんやりした静謐な空気の中を歩きはじめる。

「この辺りから道が荒れてくるから、足元に気をつけて」

「ふふん、この程度どうってことないわ。山道なんて言ってもたいしたことないわね」
出発してからしばらくは、山の斜面も緩やかだった。デルフィも軽快な足取りで僕の後を歩いてくる。

しかし山を登っていくにつれて、地面には荒れた岩場が多くなってくる。
時折、急な斜面に出くわす場面も増えはじめた。

人間が登るために整備された山ではないので、当然なのだが。

「ちょ、ちよつと、こんなきつい山登りが続くの？」

しばらく進むと、デルフィが息を切らしはじめる。先程の自信はどこへいったのやら。
「ワイバーンの巢は中腹にあるから、もうしばらく頑張らないと。……つと、ちよつと下がって！」

微かに何かが羽ばたくような音を感じて、咄嗟^{とっさ}に手近な岩陰へと身を隠す。

程なくして、ワイバーンがやや上空に羽ばたく姿が見えた。あれに見つかると思っただ。
「隠れてやり過ぎた方がいいかな……って、あれは」

僕はもう少し岩場の奥まで隠れようとして——そこに横たわる二つの人影を見つけた。
「ね、ねえ、あれって……」

言われるまでもなく、人間である。

ぴくりとも動かず、地面には乾いた血らしき赤黒い染^しみが広がっている。

一人は、黒いローブを着た小柄な男性。もう一人は、鎧に身を包^{せんぶ}んで戦^{せんぶ}斧を背中に括^くり付けた長身の男性。

近づく、ローブの男性の片腕が千切れて転がっていた。

鎧の男性も脇腹を防具ごとひどく引き裂かれて、そこから臓物もこぼれ落ちていた。

二人とも既に絶命しているのは明らかだ。

「う……うえっ……」

デルフィが口を押さえ、えづくような仕草^{しぐさ}を見せる。

「《デイハイド》」

僕はデルフィの周囲を覆い隠してから、仕事に取りかかる。

まず、おそらくはシェイドさんであろう鎧の男性へと近づいていく。

すぐ側には荷物が転がっており、それを開いて中を確認する。少し探すと、シェイドさんの勇者認定証がそこから出てきた。

兜を取ると、その目は恐怖で見開かれたまま絶命していた。

^{まぶた} 瞼を指先で閉じ、念写魔法を込めた羊皮紙^{ようひし}でその光景を記録する。

「シェイドさんは死亡。死因は……ワイバーンらしき魔獣の鋭い爪で防具ごと引き裂かれ

た、つてところかな」

手元の調査報告メモにシェイドさんの死亡状況を書き記しながら、一人呟く。

もう一つの遺体は櫂の杖を左手に持ったまま、右腕が根元から千切れていた。その傷からの出血で死に至ったのだろうと推測される。シェイドさんの言っていた治癒魔術師だろう。

これだけの傷を負っては、治癒魔法ではどうしようもない。

状況的に、ワイバーンに襲撃を受けて大怪我を負ったまま身を隠したのだろうか。

「あともう一人、ミックさんはこの辺りにいないのかな」

もう一人の勇者保険加入者であるミックさんは、見当たらない。

もつと上にいるか、はたまたワイバーンに捕まって巣まで運ばれたか。

「デルフィ、そろそろ大丈夫？」

声をかけると、デルフィは《ディハイド》に手を触れて解除する。

「はあっ、はあ……。そ、その二人は……？」

「二人とも死んでるよ。一人は、契約者のシェイドさんだった。ミックさんの姿は近くに見当たらないね。彼を探しに、もつとワイバーンの巣に近づかないと」

「な、なんで……なんであんたは、人が死んでるのにそんなに淡々としていられるの！」

デルフィは震えた声を上げる。

怒り、恐怖、戸惑い。そうした感情がデルフィの表情から伝わってくる。

「僕の仕事は、冒険者の生き死にを確認することなんだ。これまでに何人もの冒険者が死んだ姿を見てきた。たぶん、感覚が麻痺^{まひ}しちゃってるんだろうね」

「……ダメよ、そんなの」

デルフィは、意を決したかのように遺体の方を向いて両手を胸の前で組む。

「どうしたの？」

「王国のために魔物と戦って散った勇敢な冒険者に、祈りを捧げているのよ。あなたも同じようにして、彼らの安らかな眠りをお祈りしなさい」

「なんで僕まで……」

「いいから言われた通りにしなさい！」

僕はデルフィの勢いに負けて、目を閉じて二人の冒険者へ形ばかりの祈りを捧げた。

「さあ、行くわよ。あの軽薄な弓矢使いはまだ生きてるかもしれないでしょ？」

「ミックさんね。会社のお客さんだから、あまり失礼な呼び方は控えてね」

僕達は再び山の中腹を目指して歩きはじめた。

一時間ほど登山を続けて、〈ハデス山〉の中腹付近に至る。

ここまでも何度かワイバーンに遭遇しかけたが、いち早く隠れてやり過ごした。

良い意味で計算外だったのは、デルフィの魔法で水が常に手に入ることだった。

途中で山の奥へ水場を探しに行く必要がないのは、かなり時間の節約になる。

「はあ、はあ……。結構高いところまで、登ってきたんじゃないかしら？」

「そうだね。もう少し登ったら深い洞窟があって、そこにワイバーンの巣があるんだ。さすがにこれ以上近づくと身を隠し切れないだろうし、どうしようかな……」

と、思案していたその時。

鋭く空を裂くような力強い羽音と、人間が走る足音が聞こえた。

「《デイハイド》！」

考えるより先に《デイハイド》を発動して身を隠す。

その数秒後。

少し離れた斜面を滑るようにして駆け下りる人物が視界に入る。

癖のある金髪を振り乱し、弓を手に時折振り返りながら矢を射るその姿。間違いなく契約者のミックさんだった。

そして彼を追って飛び回るのは、二体のワイバーン。

ミックさんは逃げ回りながらも、必死に矢を放ってワイバーンに応戦していた。

しかし木製の矢はワイバーンの硬い鱗に弾かれて刺さらず、ダメージを与えられない。

「ちよ、ちよっとヒカゲ、何とかしないと！」

「そうだね。といっても、ワイバーン二体の相手はちよっと難しいかな。ミックさんを助けて



逃げよう。デルフィはここで待ってて」

僕は一度《デイハイド》を解除して、再度デルフィ一人だけを覆うよう発動させる。ナイフを抜いて駆けだすと、すぐにミックさんは僕に気づく。

「お、お前は確か……」

「まいど、ブレイヴカンパニーの調査員です。安否調査に参りました」

言いながら僕はワイバーンの首元を目がけて、投げナイフを一本放る。

しかし分厚い鱗で覆われた羽で振り払われて、ナイフはカランと地面に落ちた。

「ダメだ、俺の矢もあの翼を貫けなかった。シェイドとカイの仇に一匹くらいは倒したかったけど、結局このザマだ」

ミックさんの背中にはざっくりと裂けたような傷があつて、青白い顔をしていた。おそらくワイバーンの爪にやられたのだろう。

致命傷ではないが、このまま二体のワイバーンから逃げ続けるのが困難なのは明白。

「危ない！」

ワイバーンが急降下して襲いかかるのを、何とかミックさん押し倒して回避させる。

鋭い爪が地面を叩き、土埃が舞う。

「ううっ……くそっ……」

既に体力も限界が近かったのか、ミックさんはすぐに立ち上がれず呻きを上げる。

今が好機とばかりに体長三メートルはあろうかというワイバーンが二体、地面に降り立つ。獲物を品定めするかのようににじり寄ってくる。

硬い鱗に覆われた体軀は強靱で、羽先から伸びた爪が鈍く光を反射していた。

僕は銀のナイフを右手に構えて、腰の投げナイフへと左手を伸ばす。

さて、困った。ナイフの刃が通りにくい魔物が二体。僕の戦い方では相性が悪い。

逃げようにも、ミックさんがこの状態では厳しい。

「俺はもういい……保険屋、お前はとっとと逃げろよ」

ミックさんは力のない声を僕に向けて絞りだす。

「時間を稼ぐので、頑張って逃げてください」

僕はそう答えて、呼吸を整え神経を集中させていく。

ワイバーンのほんの些細な動きも見逃さないよう、瞬きもせず凝視する。どんな攻撃を繰りだしてくるのかを脳内で予測しながら、徐々に間合いを詰めていく。

やがて攻撃の間合いに入った僕に、ワイバーンは飛びかかって足先の鋭い爪を振るう。

その大きな体に似合わない俊敏な動作で、ビュウと鋭く空を切って僕の喉元に爪が迫る。

「おっと」

飛び退いてその軌道から身を躲す。

それに合わせて、もう一体のワイバーンが素早く前脚を振り下ろしてくる。

ガシイ！

ナイフの峰で爪を受け流して身を屈める。

次の瞬間にはその場から飛び退きつつ、投げナイフをワイバーンの喉元目がけて投擲。

しかしワイバーンは咄嗟に翼を翳して、ナイフを叩き落とす。

ワイバーン自身も、本能で知っているのだろう。その喉元だけは鱗で覆われておらず、刃が通りやすいということ。

「二体相手じゃあ、そう長持ちはしないかな」

眩きつつミックさんの方を見ると、何とか立ち上がって斜面を降りはじめていた。

彼が逃げ切るまでワイバーンを引きつけて、時間を稼がねばならない。

そんな僕の思惑を、ワイバーンも察知したのか。

一体は僕と対峙^{たいじ}したままで、もう一体は不意に飛び上がりミックさんの方へ向かう。

「ミックさん、早く逃げて！」

「く、くそっ……」

僕はミックさんの方に駆けだそうとする。

しかし目の前のワイバーンが鋭い牙^{きば}を剥^むきだしにして、齧^{かじ}りつこうと迫ってくる。この状況ではミックさんを助けに行けない。

ああ、これはダメだ。たぶんミックさんは死ぬ。

彼の死を前提に、この後ワイバーンからどう逃げるか算段を立てはじめ。

「《アクアケージ》！」

——そんな僕の考えを引き止めるかのように、デルフィの声が辺りに響き渡った。同時に、二体のワイバーンを覆い尽くすほどに大量の水が発生する。

水は一瞬でばしやりと音を立てて、地面に落ちてしまふ。

しかしワイバーンは一瞬とはいえ、突如^{おほ}溺れたことでひどく混乱していた。

羽をぶざまにばたつかせながら、地面を転がり回る。ミツクさんに飛びかかろうとしたやつも、バランスを崩して落下していた。

——考えるより前に動く。僕は銀のナイフを強く握り締め跳躍。

眼前に対峙していたワイバーンの首元に、ナイフを素早く突き立てる。

「ギヤアアア！」

耳をつんざくような叫喚^{きようかん}。

構わずナイフを引き抜いて、もう一体のワイバーンへと駆けだす。

そのワイバーンは地面から既に起き上がっており、体勢を整えつつあった。

しかし、体中がびしょ濡^ぬれのせいか動きがまだ鈍い。今ならやれる。

「ギイイ！」

鳴き声とともに爪が振り下ろされる。遅い。一瞬で判断し、僕はさらに前方へ加速。

ワイバーンの攻撃より早く懐^{ふところ}に飛び込み、無防備に晒^{さら}された喉元にナイフを一突き。すぐにナイフを引き抜いて、地面に転がり距離を取る。

ワイバーンは二体とも、麻痺毒により地面に倒れて痙攣^{けいれん}しはじめていた。

「デルフィ、今のは君の魔法？」

「はあ、はあ……。私夢中で、なんとかしようと思って……」

デルフィの方を見ると、がくがくと膝を震わせて恐怖に表情を青ざめさせていた。

彼女からすれば、この上なく恐ろしかっただろう。それでも、勇気を振り絞って『デイハイド』の膜から出て魔法を使った。

なんとなく、デルフィがどういう人物かわかってきた気がする。

「さてと。ミックさん、立てますか？」

ミックさんは苦しそうに息を荒げながらも、なんとか立ち上がる。

そして僕の横を通り過ぎて、麻痺毒で動けないワイバーンの方へふらふらと歩いていく。

「シェイドとカイの仇だ……せめて、一匹くらい首を持ち帰ってやる」

「ミックさん、それは駄目です。ワイバーンの硬い骨を断ち切って首を切断するのは、相当の体力と時間がいります。首を落とし終える前に、別のワイバーンに見つかります」

「……いいからどいてろ」

彼の感情は理解できなくもない。でも、それを止めて彼を助けるのが僕の仕事だ。

「その怪我では、無駄な体力を消費している余裕ありません。一刻も早くここから離れて、いったんあなたを治療します。体力が回復したら、魔王領を脱出して王国に戻りましょう」

「ふざけんな！ 俺は仲間を目の前で二人殺されてるんだぞ！ 例えここで死のうが、このワイバーンどもを自分の手で殺して……」

ミックさんはそう言つて、僕に突つかかろうとする。

同時に、彼の頭上に水が出現してばしゃりと降りかかった。

「うわっ、冷てえ！ ……な、なんだ？」

「ここで死ぬなんて、許さないわ」

デルファイがぐつと歩み寄りながら、ミックに言い放つ。

「大人しく私たちに助けられなさい。これは命令よ！」

「この前の可愛い子ちゃん……。君みたいな子も、こんな危険なところまで来てたのか？」

「そうよ。この私が目の前にいるからには、命を粗末にするような真似は絶対に許さないわ」

強固な意志を感じさせるその言葉にミックさんは気圧けおされて、表情から熱が引いていく。

「随分偉そうな子だな……。でも、おかげで少し頭が冷えたわ。今はあんたらの言う通り、生き延びることを優先する」

その言葉を聞いて、デルファイは満足げに笑みを浮かべる。

一方のミックさんは、顔を赤くしながら惚けたような視線をデルフィへ向けていた。ああ、たぶんこれ本気で好きになっちゃった感じだろうか。

残念ながら、ここで呑気に恋愛ごっこをしている状況ではない。

「とにかく、急いで麓の辺りまで下りよう。他のワイバーンに見つかったら面倒だから」
「わ、わかったわ」

倒れたワイバーンに背を向けて、僕達は山道を下りはじめた。

「い、痛くて……もつと優しく手当てしてくれよ、保険屋」

山の麓近くで手頃な岩陰を見つけて、僕はミックさんを手当てした。

化膿止めの薬草を塗り、包帯を巻いて手早く治療を進めていく。デルフィの力を借りて水をたくさん飲ませて、保存食も彼にほとんど食べさせた。

幸いにもまだ陽が落ちるまでは時間もある。

「これはあくまで応急処置です。治癒院で早めに治療を受けないと悪化しますから、できれば今日中に王国へ戻りましょう。辛いかもしれませんが、頑張ってください」

「いや、おかげで大分回復できた。……なあ、出発する前に一つ聞いていいか。お前らの仕事は、俺の生き死にを確認することじゃないのか？　なんで助けてくれたんだ？」

「会社の方針です。討伐経験が浅いお客様には、早めに調査に向かって撤退をサポートしてい

るんですよ。大怪我や遭難で動けなくなってしまう方も多いですから」

「……そんなに未熟なつもりはなかったんだけどな。実際、仲間が二人も殺されてるんだから何も言えねえや」

ミックさんは少しだけ涙ぐんだように見えた。

しかしすぐに衣服の袖で目元を拭って、勢いよく立ち上がる。

「とにかく、俺はもう大丈夫だ。悪かったな、治療と休憩に時間を取らせて」

僕達は休憩を終えて、再び〈ハデス山〉を下りはじめた。

ミックさんは本当にかなり回復したようで、軽快な歩調で山道を進んでいた。この辺りの身のこなしは、さすがに狩人といったところである。

「なんとか、暗くなる前に王国に戻れましたね。大丈夫ですか、ミックさん？」

「こっちは怪我人だつてのに、容赦なく速いペースで歩きやがって……。でもまあ、早いうちに王国に帰れたのはありがてえな」

空が薄らと暗さを増していく頃に、僕達は城下町へ帰り着いた。あと少し遅かったら、魔王領でもう一晚を過ごすことになっていただろう。

「このまま一番近くの治癒院までお送りします。落ち着き次第、またうちの店まで来てくださ

い。勇者保険の掛け金の半分が戻ってきますから」

「ああ、すまねえな」

そうして城下町北側の治癒院まで到着すると、ミックさんは去り際にふと声を上げた。

「な、なあ、そっちの青髪の可愛い子ちゃん、あんたの名前は？」

「え、わ、私？ ええと……」

突然尋ねられて、デルフィはやや戸惑った様子を見せる。

しかしすぐに落ち着きを取り戻すと、軽い咳払いを挟んでそれに答えた。

「デルフィニ……ゴホン、デルフィよ」

「そ、そっか、デルフィちゃんか、よろしくな。……おい、そっちのシーフ、お前の名前も聞いておいてやる」

別に教えたくもないけれど、まあいいや。

「ヒカゲ・レインズです。……また魔物の討伐に行く機会があれば、ブレイヴカンパニーをご利用ください。それじゃあ、これで失礼します」

僕は軽く頭を下げてから、デルフィを連れて店の方へと歩きはじめた。

途中、ぐったりと疲れ果てたその横顔へと声をかける。

「お疲れ様。はじめての調査業務にしては、上出来だったよ。特に、ワイバーンを水浸しにしたのはいい判断だった。あれがなかったらミックさんは死んでたと思う」

「……素直に喜べないわね。無我夢中で水魔法を使ったただけなもの。そもそも氷結魔法さえ使えれば、きっと私がワイバーンを倒せるのに」

「個人的には、仕事の相棒は水魔法を使える方がありがたいけどね。戦闘以外での便利さが段違いだから」

「あ、相棒!」

デルフィは素^すつ頓^{とんきよう}狂な声を上げつつ僕を見上げる。

「何か変なこと言った?」

「相棒って、この私が王女であることを知ったうえで、よくもそんな物言いができたものね!」
「たとえ王女様だろうと、一緒に仕事する相手をそう呼ぶのはおかしいことじゃないでしょ。

気に入らなかつた?」

口を少し尖^{とが}らせて、不機嫌そうにそっぽを向きながらデルフィは答える。

「そんな呼び方をするなら、これから私のことをしっかり守りなさいよ! 私は魔物となんて戦えないんだから!」

「はいはい、わかつてるよ」

そんな話をしつつ、僕達は石畳の道を並んで歩いていった。

「ああ、やっと帰ってきたのね……もうこれ以上歩けないわ」

店に着いた頃には、陽も落ちてすっかり暗くなっていた。

ドアを開けると奥の方に人の気配を感じて、僕は声を上げる。

「社長、戻りました！ まだいるんですか!？」

少しすると、店の奥から社長が姿を見せる。

「二人とも無事戻ったか、お疲れさん。どうだったデルフィ、はじめての調査業務は？」

デルフィは荷物をどっかりと床に下ろしながら答える。

「生まれてはじめての経験が多すぎて、へとへとよ。長い距離を歩いて、魔物に襲われて、外で夜を明かして。……何より、人が死んだ姿を見たのが一番辛かったわ」

社長はその大きな体を屈めて視線を合わせつつ尋ねる。

「この仕事を続ければ、もっと危険で辛い目に遭うこともある。もう少しマシな修行先にするよう、俺からレティスに話をつけてやってもいい。どうする、デルフィ？」

「私はいずれ王位を継承する身です。辛いからと逃げだすようでは、王位を継いだとしても民衆を導くことなどできません。そのようなお氣遣いは無用です」

その反応は想定外だったようで、社長は目をぱちくりさせて驚いていた。

一方で、そんな答えをするだろうと予想していた僕は特に驚きもしなかった。

今回調査業務を共にしてみても、僕にはなんとなくデルフィの^{しん}芯みtainなものが見えつつあった。

王座に就く。その目標に対する強い意志。これは簡単に揺らがないだろう。社長は嬉しそうに笑みを浮かべると、弾はすんだ声を上げた。

「よし、それなら今日は初調査から無事帰った祝いだ！ お前達が帰る予定に合わせて、うちのカミさんに晩飯を用意してもらってな。まだ熱いうちに食え！」

台所を覗き込むと、そこには社長の言う通り豪華な夕食が用意されていた。塩漬け豚のグリル、香味野菜たつぷりのシチュー、バスケットに山盛りのロールパン。

調査帰りで空腹だった僕は、貪むさぼるようにパンと肉に齧り付き、シチューを流し込む。

「庶民の食事というのも、なかなか悪くないわね……もぐもぐ」

「調査帰りのご飯は格別だよ」

社長の奥さんがまた、料理上手なのだ。たまに差し入れてくれる食事が僕のひそかな楽しみだったりする。

「おいおいヒカゲ、もう少しゆっくり食え。デルフィも遠慮せず……つと」

お腹を満たしたら気が抜けたのか、デルフィは椅子の上でうとうとしはじめていた。

社長は小さく溜息を吐いて、優しい表情を浮かべる。

「一緒に仕事をしてみてどうだった。やっていけそうか？」

「……まあ、なんとか。苦労はしそうですね」

僕は料理を口に運びながら、デルフィの疲れ切った様子をぼんやり眺める。

確かに我が儘だったり生意気だったりして、一緒に仕事をするのが大変だった面もある。

「んん……はっ、いけない、つい眠ってしまったわ！」

デルフィが慌てて体を起こす。

「別にいいよ、そのままゆっくり寝てても。お風呂の準備ができたら起こしてあげるよ」

僕が答えると、意外そうにきょとんとした表情が返ってくる。

「あら、ヒカゲにそんな気遣いができるなんて思わなかったわ」

「一応、頑張ってくれたお礼にね。正直、途中で投げだすと思ってたんだ。ごめんね」

「私も少しはあなたに感謝しているわ。なんだかんだで、魔物から守り通してくれたし。こ、この私から^{ねぎら}いの言葉をもらえるなんて、光栄に思うことね！」

いい話になりそうだったのに、最後の偉そうな言葉で台無しである。

「はいはい、光栄でございます」

この調子なら今後もなんとかやっていけそうかな、と思いつつ僕は風呂の準備に向かう。

もつともこの時僕はまだ、知る由もなかった。

次なる苦労の種がすぐ目の前に迫っていることを。

※試読版はここまで。

『勇者保険のご加入はブレイヴカンパニーへ！』は、6月15日発売です。お楽しみに！